

ルカ傳福音書

第一章

一 我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目撃者にして、
 二 御言の役者となりたる人々の、我らに傳へし、
 三 其のままを、書き列ねんと、手を著けし者あまたある故に、
 四 我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば、
 五 テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の慥なるを悟らせん爲に、これが序を正して、書贈るは善き事と思はるるなり。

五 ユダヤの王へロデの時、アビヤの組の祭司に、
 ザカリヤといふ人あり。その妻はアロンの裔にて名をエリサベツといふ。
 六 二人ながら神の前に正しくして、主の誠命と定規とを、
 七 みな缺なく行へり。七 エリサベツ石女なれば、
 八 彼らに子なし、また二人とも年邁みぬ。

九 八 さてザカリヤその組の順番に當りて、
 十 神の前に祭司の務を行ふとき、九 祭司の慣例にしたがひて、
 十一 籤をひき主の聖所に入りて、
 十二 香を焼くこととなりぬ。一〇 香を焼くとき民の群みな外にありて祈りたり。
 十三 二時に主の使あらはれて、
 十四 香壇の右に立ちたれば、
 十五 ニ ザカリヤ之を見て、
 十六 心騒ぎ懼を生ず。一三 御使いふ『ザカリヤよ懼るな、
 十七 汝の願は聽かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん、
 十八 汝その名をヨハネと名づくべし。一四 なんぢに喜悅と歡樂とあらん、
 十九 又おほくの人もその生るるを喜ぶべし。一五 この子、
 二十 主の前に大ならん、
 二十一 また葡萄酒と濃き酒とを飲ま

イ羅四・二一 二可四・四、一六、四、一
 口約一五・二七 (徒一 二〇 徒八・四、一 徒一・一
 二二、二二) 四・二五、一六六、ト徒一八・二五 羅二
 八 彼後一・一六 約登 一七・一一 二八 哥前二
 一・一一 一七・二一 一九 加六・六 提 又代上二四・一〇
 後三・一〇 後三・一〇 (徒一八 一三 撒前二・一五、三六、
 三六、二二) 出三〇・六一八 二
 二 路一・三〇 (太一四 二七) 路一・六〇、六三
 路一・六三、七三、七四 太一・一八 路七

本太三・五、六 井(前)一七・一七 二七
 ナ六一・一、一四を見よ ノ太一八・一〇を見よ ヤ路一・六二
 ラ路一・七六 オ但八・二六、九・二 マ王下二・一、五 代上 コ太二・二三
 ム彼前二・九 一路一・二六 九・二五 エ太一・一八
 ウ路一・七六 ク結三・二六、二四、ケ創三〇・二三 聖四 テ太一・一六、二〇路
 二・四 ア路一・四二を見よ ユ聖七・一四
 ヌ太一・二一、二五路 一・三五、七六、六、
 サ(路)一・二二 二・二一 メ太一・二一、二五路 三五 徒七・四八
 半路一・二三(太一四) ミ路二・九一、一
 シ可五・七を見よ 路

一七六 母の胎を出づるや聖靈にて満されん。一六 また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの神に歸らしめ、一七 且

一八 エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん。これ父の心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせて、整へたる

一九 民を主のために備へんとてなり。一八 ザカリヤ御使にいふ「何に據りてか此の事あるを知らん、我は老人にて、妻

二〇 もまた年邁みたり」一八 御使こたへて言ふ「われは神の御前に立つガブリエルなり、汝に語りてこの嘉き音信を告

二一 げん爲に遣さる。二〇 視よ、時いたらば、必ず成就すべき我が言を信ぜぬに因り、なんぢ物言へずなりて、此らの

二二 事の成る日までは語ること能はじ」二二 民はザカリヤを俟ちて、其の聖所の内に久しく留まるを怪しむ。二三 遂に

二三 出で來りたれど語ること能はねば、彼らその聖所の内にて異象を見たることを悟る。ザカリヤは、ただ首にて示

二四 すのみ、なほ啞なりき、二三 斯て務の日満ちたれば、家に歸りぬ。

二五 此の後その妻エリサベツ孕りて五月ほど隠れをりて言ふ、二五 主、わが恥を人の中に雪がせんとして、我を願

二六 み給ふときは、斯く爲し給ふなり」

二七 二六 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレといふガリラヤの町にをる處女のもとに、神より遣さる。二七 この

二八 處女はダビデの家のヨセフといふ人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云ふ。二八 御使、處女の許にきたりて言

二九 ふ「めでたし、恵まるる者よ、主なんぢと偕に在せり」二九 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如

三〇 何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、三〇 御使いふ「マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。三一 視よ、なんぢ

三一 孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。三一 彼は高者の子と稱へられん。また主たる

神、これに其の父ダビデの座位をあたへ給へば、^{三三}ヤコブの家を永遠に治めん。その國は終ることなかるべし』

^{三四}言マリヤ御使に言ふ『われ未だ人を知らぬに、如何して此の事のあるべき』^{三五}御使こたへて言ふ『聖靈なんぢに

^{三六}臨み、至高者の能力なんぢを被はん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と稱へらるべし。^{三六}視よ、

なんぢの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といはれたる者なるに、今は孕りてはや六月に

^{三七}なりぬ。^{三三}それ神の言には能はぬ所なし』^{三八}マリヤ言ふ『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成

れかし』つひに御使、はなれ去りぬ。

^{三九}その頃マリヤ立ちて、山里に急ぎ往き、ユダの町にいたり、^{四〇}ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せ

^{四一}しに、^{四二}エリサベツ、その挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖靈にて満され、^{四三}聲高らかに呼は

^{四四}りて言ふ『をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。^{四三}わが主の母われに来る、われ

^{四五}何によりてか之を得し。^{四四}視よ、なんぢの挨拶の聲、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びをどれり。^{四五}信ぜ

^{四六}し者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり』^{四六}マリヤ言ふ『わが心、主を崇め、^{四七}わが

^{四八}靈は、わが救主なる神を喜び奉る。^{四八}その婢女の卑しきをも顧み給へばなり。視よ、今よりのち萬世の人、われ

^{四九}を幸福とせん。^{四九}全能者、われに大なる事を爲し給へばなり。その御名は聖なり、^{五〇}その憐憫は代々、畏み恐る

^{五一}る者に臨むなり。^{五一}神は御腕にて、權力をあらはし、^{五二}心おもひの念ねんに高ぶる者を散らし、^{五三}權勢けんせいある者を座位より下し、

イ母後七・一三 詩一 一 米四・七 約一 一・二一六・八 七、二二・二二 三・八一六 路一一 ナ創一七・七 出二〇 ム出八・一〇、一一

三三・二一 賽九 二・三四 黙一一・二 一・二一六・八 七、二二・二二 三・八一六 路一一 ナ創一七・七 出二〇 ム出八・一〇、一一

六・七、一六・五 五(太二八・一八) 二・二七 路八・六 ル約一三・一三(路二 三・二七 賽四・二二) 二七 羅四・二二 三(路一・二〇) 三・四 猶二五 二〇 一・二五 賽四〇・一

井創四五・二六 伯五 一六
 一 詩七八・七〇 耶三一 二二三 路二・二二
 (雅四・一〇) 三、三三・一四一 耶三一 三三・五
 ノ母前二・五 詩三四 一六 路一・六七一 七路一・二二
 一〇 太五・六 七五 路一・二二六〇
 オ(創一七・一九 詩一 九 創一九・一九 七路一・二二〇
 三三・二一 加三・ 瑪創一七・二二 利一 七路一・三九を見よ
 ア路二・一九、五一 一・一三、七二・一 二母前二・一、一〇 母 三徒三・二一
 サ創三九・二 詩八〇 八、一〇六・四八 後三三・三 詩一八 三、四九・二〇 耶 一米七・二〇
 一七、八九・二一 出三・一六、四・三一 二、八九・二七、 三、四九・二〇 耶 口詩一〇五・八、九、
 徒一・二二 路七・一六 一三三・一七 結二 二三五・六、三〇 一〇六・四五
 七路一・四一 九・二二 九・二二 一〇 但九・二四
 二耳二・二八 三三八 來九・二二 ヒ太一・一六、一六 羅一・二 彼後三・二
 二王上一・四八 詩四 (路一・七一) 路三・二三、三一 ス太一・二二 (路一、

五三 卑しき者を高くし、五三 飢ゑたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給ふ。五四 また我らの先祖に告げ

五五 給ひし如く、五五 アブラハムと、その裔とに對する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給へり』五六 斯

五七 てマリヤは、三月ばかりエリサベツと偕に居りて、己が家に歸れり。

五七 儲エリサベツ産む期みちて男子を生みたれば、五八 その最寄のもの親族の者ども主の大なる憐憫を、エリサ

五九 ベツに垂れ給ひしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。五九 八日めになりて、其の子に割禮を行はんとて人々きたり、

六〇 父の名に因みてザカリヤと名づけんとせしに、六〇 母こたへて言ふ『否、ヨハネと名づくべし』六一 かれら言ふ『なん

六二 ぢの親族の中には此の名をつけたる者なし』六二 而して父に首にて示し、いかに名づけんと思ふか、問ひたるに、

六三 ザカリヤ書板を求めて『その名はヨハネなり』と書きしかば、みな怪しむ。

六四 ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いひて神を讚めたり。六五 最寄に住む者みな懼をいだき、又

六六 すべて此等のこと徧くユダヤの山里に言ひ囃されたれば、六六 聞く者みな之を心にとめて言ふ『この子は如何なる

六七 者にか成らん』主の手かれと偕に在りしなり。六七 斯て父ザカリヤ聖靈にて満され預言して言ふ六八 『讚むべきか

六九 な、主イスラエルの神、その民を顧みて贖罪をなし、六九 我等のために救の角を、その僕ダビデの家に立て給へ

七〇 り。七〇 これぞ古へより聖預言者の口をもて言ひ給ひし如く、七一 我らを仇より、凡て我らを憎む者の手より、取り

七二 出したまふ救なる。七二 我らの先祖に憐憫をたれ、その聖なる契約を思し、七三 我らの先祖アブラハムに立て給ひし

御誓を忘れずして、七四 我らを仇の手より救ひ、生涯、主の御前に、七五 聖と義とをもて懼なく事へしめ給ふなり。
 七六 幼児よ、なんぢは至高者の預言者と稱へられん。これ主の御前に先立ちゆきて其の道を備へ、七七 主の民に罪の赦による救を知らしむればなり。七八 これ我らの神の深き憐憫によるなり。この憐憫によりて、朝の光、上より臨み、七九 暗黒と死の蔭とに坐する者をてらし、我らの足を平和の路に導かん。八〇 斯て幼児は漸に成長し、その靈強くなり、イスラエルに現るる日まで荒野にゐたり。

第二章

一 その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。二 この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの總督たりし時に行はれし初のものなり。三 さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に歸る。四 ヨセフもダビデの家系また血統なれば、五 既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムといふ處に到りぬ。六 此處に居るほどに、マリヤ月満ちて、七 初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥させたり。旅舎にをる處なかりし故なり。八 この地に野宿して夜、群を守りをる牧者ありしが、九 主の使その傍らに立ち、主の榮光その周圍を照したれば、甚く懼る。一〇 御使かれらに言ふ「懼るな。視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんぢらに告ぐ、二 今日ダビデの町にて汝らの爲に救主生まれ給へり、これ主キリストなり。三 なんぢら布にて包まれ、馬槽に臥しをる嬰兒を見ん、是の徴なり」四 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加はり、神を讚美して言ふ、

イ創一・二三、一七、二路一・三二を見よ、五・三一
 四、二二・一六、一、ホ太一・九を見よ、チ(馬四・二、弗五・一、ル路二・四〇、レ母前一七・二二(母ナ約四・四二)徒五・ウ母前二・三四、王下
 七、ハ餐四〇・三、馬三、四、彼後一・一九、ワ太二・四・一四を見よ、前一六・一、四、約、三二(太一・二二)一、九・二九、二〇、
 口羅六・二八、二二弗、一、四・五、太一、リ察九・二、四二・七、カ太二・二七(路三、ソ太一・二五、三六(路一・四三))一、四、
 四二・四多二・二二、一〇、路一・二七、太四・一六、徒二六、ツ路一・二一、徒五・一、ム太一・一六、一六、井詩一〇三・二〇、彼
 彼前一・一五、ト耶三一・三四、可一、二八、ヨ徒五・三七、九を見よ、一六、二〇、約一、前一・二二(提前三
 ハ來九・一四、四、路三・三、徒、又羅五・一、夕路一・二七、ネ(太一四・二七)、四一、一一・二七、二六)

ノ路一九・三八 弗一 二・一七 西一・二〇 マ太九・八を見よ 一六、二三・二九、 一〇二
 六、三・二二 黙五 ク(路三・二二) ケ路一・五九を見よ 三四・一九 民三・ ア(路一・六)
 ・一三(太二・九) ヤ創三七・一一 但七 フ路一・三一を見よ 一三、八・一七、 サ賢四〇・一
 才賢五七・一九 路一 二・八 路一・六六、 コ利二・二一六 一八・一五 キ(可一五・四三)路二
 ・七九 羅五・一 弗 二・五一 工出二三・二、一三一 テ利一・二・八 (利五・ 三八、二三・五一)
 工詩八九・四八 約八 工賢五七・一、二 黙 六
 五一 來一・一五 一四・一三 四九六、六〇・一
 二(太二・二二) ヒ創四六・三〇 弗一 一三、太四・一六
 二二三 二二三 徒一三・四七、二六
 七九 弗三・六

一四 『いと高き處には榮光、神にあれ。地には平和、主の悦び給ふ人にあれ』^(一) 御使等さりて天に往きしとき、

一六 牧者たがひに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給ひし起れる事を見ん』^(二) 乃ち急ぎ往きて、マリヤと

一七 ヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあふ。^(三) 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げられたれば、^(四) 一八 聞

一九 く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。^(五) 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思ひ回せり。^(六) 牧者

は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて神を崇め、かつ讚美しつつ歸れり。^(七)

二 二八日みちて幼兒に割禮を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名を

イエスと名づけたり。^(八)

三三 三三 モーセの律法に定めたる潔の日満ちたれば、彼ら幼兒を携へて、エルサレムに上る。^(九) 三三 これは主の律法に

三四 『すべて初子に生るる男子は主につける聖なる者と稱へらるべし』と録されたる如く、幼兒を主に獻げ、^(一〇) また

三五 主の律法に『山鳩 一對あるひは家鳩の雛二羽』と云ひたるに遵ひて、犠牲を供へん爲なり。^(一一) 三三 視よ、エルサレ

ムにシメオンといふ人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖靈その上に

三六 在す。^(一二) 三六 また聖靈に主のキリストを見ぬうちには死を見ずと示されたりしが、^(一三) 三三 此のとき、御靈に感じて宮に入

三八 る。兩親その子イエスを携へ、この子のために律法の慣例に遵ひて、行はんとて來りたれば、^(一四) 三八 シメオン、イエ

三九 スを取りいだき、神を讚めて言ふ、^(一五) 三九 主よ、今こそ御言に循ひて僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。^(一六) 三〇 わが目は、

三二 はや主の救を見たり。^(一七) 三二 是もろもろの民の前に備へ給ひし者、^(一八) 三三 異邦人を照す光、御民イスラエルの榮光なり』

三三 かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、三四 シメオン彼らを祝して母マリヤに言ふ『視よ、

この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん爲に、また言ひ逆ひを受くる徴のために置かる。

三五 剣なんぢの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顯れん爲なり』

三六 爰にアセルの族バヌエルの娘に、アンナといふ預言者あり、年いたく老ゆ。處女るとき、夫に適きて七年

三七八 ともに居り、三三七 八十四年寡婦たり。宮を離れず、夜も晝も、斷食と祈禱とを爲して神に事ふ。三八 この時すすみ寄

りて、神に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖を待ちのぞむ人に、幼児のことを語れり。

三九 さて主の律法に遵ひて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに歸り、己が町ナザレに到れり。

四〇 幼児は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の恵その上にありき。

四一 斯てその兩親、過越の祭には年毎にエルサレムに往きぬ。四二 イエスの十二歳のとき、祭の慣例に遵ひて上

りゆき、四三 祭の日終りて歸る時、その子イエスはエルサレムに止りたまふ。兩親は之を知らずして、四四 道伴のう

ちに居るならんと思ひ、一日路ゆきて、親族・知邊のうちを尋ねれど、四五 遇はぬに因りて復たづねつつエルサレ

ムに歸り、四六 三日のち、宮にて教師のなかに坐し、かつ聽き、かつ問ひ給ふに遇ふ。四七 聞く者は皆その聰と

答とを怪しむ。四八 兩親イエスを見て、いたく驚き、母は言ふ『兒よ、何故かかる事を我らに爲しぞ、視よ、汝の

父と我と憂ひて尋ねたり』四九 イエス言ひたまふ『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬ

（ナ）

イ太二・四六を見よ ハ徒二八・二三
口察八・一四 何一四 二詩四二・一〇 約一 九
九 羅九・三二、三 九・二五 九・二五
三 五前二・二三 本好前一一・一九 約 五
哥後二・一六 彼前 登二・一九 又路五・三三（徒一三）
二・七八（太二一） へ書一九・二四 二六、二五、四
ト路二・三八（徒二一） ル可一五・四三 路二 二六
二五、二四、二二 力路一・八〇（路二） 三四・二三 申一六
（路一・六八） 五二 二・一六
ヨ書二・二 路二 三出二・二五
五二 西二・二三 路五・一七及徒五・
夕路四・二二 約一 三四を見よ（徒前 一・七）
レ出三三・一五、一七、 太七・二八可一・二
二 路四・二二、三二 二 路四・二二、三二
約七・一五、四六 井路二・三九を見よ
ナ太二・四六を見よ ノ路二・一九を見よ
ラ路三・二三、四・二 才路二・四〇
二（路二・四九） ク母前二・二六
ム約二・一六 ヤ太二七・二を見よ
マ太一四・一を見よ

ケ約一八・二二・三、五
 二四 徒四・六 五太三・一五 可一
 フ太二六・三を見よ 四 一、二六・二〇 黙 詩九八・二 路二
 コ二一・一〇 太三・一 テ可一・一五 路一・七 ア察四〇・三・一五 約 一〇 羅一〇・二二、 一八 一〇 羅一〇・二二、
 一〇 可一・三一 七、二四・四七 徒 一・二二三 キ太三・七、一三・三 一 羅九・六・一八 加三 一六・三〇 二八)

五〇 母これらハハの事ことをことごとく心こころに藏かくむ。

五二 イエス智慧ちえも身みのたけも彌増いよいより神かみと人ひととにますます愛あいせられ給たまふ。

第三章

一 テベリオ・カイザル在位ざいゐの十五年じふごねんポンテオ・ピラトは、ユダヤの總督そうとく、ヘロデはガリラヤ分封ぶんほうの國守こくしゆ、その兄弟きやうだいピリポは、イツリヤ及びテラコニテの地ちの分封ぶんほうの國守こくしゆ、ルサニヤはアビレネ分封ぶんほうの

三二 國守こくしゆたり、ニアンナスとカヤパとは大祭司だいきいしたりしとき、神かみの言ことば、荒野あらのにてザカリヤの子こヨハネに臨のぞむ。三 斯かくてヨ

四 ルダン河がはの邊ほとりなる四方しほうの地ちにゆき、罪つみの赦ゆるしを得えさする悔改かいあらたのバプテスマを宣傳のべつたふ。四 預言者よげんしやイザヤの言ことばの書ふみに

五 「荒野あらのに呼よはる者ものの聲こゑす。「主しゆの道みちを備そなへ、その路みちすぢを直なほくせよ。五 もろもろの谷たには埋うづめられ、もろもろの山やまと

六 岡かかとは平たひらげられ、曲まがりたるは直なほく、嶮けはしきは坦たひらかなる路みちとなり、六 人ひとみな神かみの救すくいを見みん」と録しるされたるが如ごとし。

七 諸さてヨハネ、バプテスマを受うけんとて出いできたる群衆ぐんじゆうにいふ「蝮まじしの裔すえよ、誰たが汝なんぢらに、來きたらんとする御怒みいかりを避さく

八 べき事ことを示しめしたるぞ。ハさらば悔改かいあらたに相應ふまはしき果みを結むすべ。なんぢら「我われらの父ちちにアブラハムあり」と心こころのうちに

九 言いひ始はじむな。我われなんぢらに告つぐ、神かみはよく此これらの石いしよりアブラハムの子等こどもらを起おこし得え給たまふなり。九 斧おのははや樹きの根ね

一〇 に置おかる。然されば凡すべて善よき果みを結むすばぬ樹きは、伐きられて火ひに投なげ入いれらるべし。一〇 群衆ぐんじゆうヨハネに問とひて言いふ「さら

二 ば我われら何なにを爲なすべきか」一 答こたへて言いふ「二つの下衣したぎをもつ者ものは、有もたぬ者ものに分與わけあたへよ。食物しょくもつを有もつ者ものもまた然しかせ

三 三 取税しゆぜい人にんもバプテスマを受うけんとて來きたりて言いふ「師しよ、我われら何なにを爲なすべきか」三 答こたへて言いふ「定さだりたるもの

一四 の外、なにをも促るな』一四 兵卒もまた問ひて言ふ『我らは何を爲すべきか』答へて言ふ『人を劫かし、また誣ひ訴ふな、己が給料をもて足れりとせよ』

一五 民、待ち望みたるれば、みな心の中にヨハネをキリストならんかと論ぜしに、一六 ヨハネ凡ての人に答へて言ふ『我は水にて汝らにバプテスマを施す、されど我よりも能力ある者きたらん、我はその鞋の紐を解くにも足らず。彼は聖靈と火にて汝らにバプテスマを施さん。一七 手には箕を持ちたまふ。禾場をきよめ、麥を倉に納めんとてなり。而して穀は消えぬ火にて焚きつくさん』

一八 ヨハネこの他なほ、さまざまの勸をなして、民に福音を宣傳ふ。一九 然るに國守(ヘロデ)、その兄弟の妻(ヘロデヤ)の事につき、又その行ひたる凡ての悪しき事につきて、ヨハネに責められたれば、二〇 更に復一つの悪しき事を加へて、ヨハネを獄に閉ぢこめたり。

二一 民みなバプテスマを受けし時、イエスもバプテスマを受けて祈り給へば、天ひらけ、二二 聖靈、形をなして鴿のごとく其の上に降り、かつ天より聲あり、曰く『なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ』二三 イエスの、教を宣べ始め給ひしは、年おほよそ三十の時なりき。人にはヨセフの子と思はれ給へり。ヨセフの父はヘ

二四 リ、二四 その先はマタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、二五 マタテヤ、アモス、ナホム、エスリ、ナンガイ、二六 ママハテ、マタテヤ、シメイ、ヨセク、ヨダ、二七 ヨハナン、レサ、ゾロバベル、サラテル、ネリ、二八 メルキ、二九 アデイ、コサム、エルマダム、エル、二九 ヨセ、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、三〇 シメオン、ユダ、ヨセ

イ出二三・一 利一九 二一六一一七 太三・ へ耳二・二八 徒二・ 子米四・二二 太一三
 一・一六 一・二二 可一・ 四、一一・二五 哥 三・三〇 又可九四三、四八
 口勝四・一一 提前六 七、八 約一・二六、 前六・一一、 一二、 一三 里 一・四 羅二九・五
 一・一八 二七 俱二・三五 何一三 三・二七 三三六 三・二七 可一九 ツ民四三、四七 代上
 八(約一・二〇) ホ後約三・二一 ト(賽三〇・二四) 三 三 太一四・三を見よ 夕太一四・二三を見よ 太二二・二七(太一、
 一六一一三) 一六三 路一 一六三 五五 路一 二七、三一 約六、
 四二

二四 イエス御靈の能力をもてガリラヤに歸り給へば、その聲聞あまねく四方の地に弘る。一五 斯て諸會堂にて教をなし、凡ての人に崇められ給ふ。

一六 儲その育てられ給ひし處の、ナザレに到り例のごとく、安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとて立ち給ひ

一七 しに、一七 預言者イザヤの書を與へたれば、其の書を繙きて、かく録されたる所を見出し給ふ。一八 主の御靈われに

在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に赦を得ることと、盲人に見ゆる事と

二〇 を告げしめ、壓へらるる者を放ちて自由を與へしめ、一九 主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり。二〇 イエス書を卷

二一 き、係りの者に返して坐し給へば、會堂に居る者みな之に目を注ぐ。二二 イエス言ひ出でたまふ『この聖書は今日

二三 なんぢらの耳に成就したり』二三 人々みなイエスを譽め、又その口より出づる惠の言を怪しみて言ふ『これヨセフ

二四 の子ならずや』二三 イエス言ひ給ふ『なんぢら必ず我に俚諺を引きて『醫者よ、みづから己を醫せ、カペナウムに

二五 て有りしといふ、我らが聞ける事どもを己が郷なる此の地にても爲せ』二四 また言ひ給ふ『われ誠に汝

二六 らに告ぐ、預言者は己が郷にて喜ばるることなし。二五 われ實をもて汝らに告ぐ、エリヤのとき三年六個月、天と

二七 ぢて、全地大なる饑饉なりしが、イスラエルの中に多くの寡婦ありたれど、二六 エリヤは其の一人にすら遣され

二八 ず、唯シドンなるサレプタの一人の寡婦にのみ遣されたり。二七 また預言者エリシヤの時、イスラエルの中に多

二九 くの癩病人ありしが、其の一人だに潔められず、唯シリヤのナアマンのみ潔められたり』二八 會堂にをる者みな之

三〇 を聞きて憤恚に満ち、二九 起ちてイエスを町より逐ひ出し、その町の建ちたる山の崖に引き往きて、投げ落さんと

イ太四・二二 へ太二・二三、一三、チ(徒)二三・一四—一 又徒一〇・三八 五五 可六・三三
 口路四・一 五四 可六・一 路 六(六) ル察四二・七 提後二 九・四一、四二 レ太四・一三を見よ ツ太一三・五七 可六
 八徒一〇・三七 二・三九、五一 リ察六一・一、二太一 二・二五、二六 カ路四・一七 (路四・三一) 四 約四・四四
 二太九・二六を見よ ト(太)一三・五四 可六 二・二八 (太)一・一、二 一 詩一四六・八 察二 ヨ太二六・五五を見よ ソ可六・一を見よ 路 一 王上二七・一、二、八 井(民)一五・三五 後
 水太四・二三を見よ 一・二(二) 五 約三・三四 九・一八、四二・七 夕約六・四二(太)一三 二・三九、五一、四、 ナ獸一・一、六 七・五八 來一三・

ノ(約一〇・三九) ヤ太七・二八を見よ コ可一・二四を見よ ア路四・一四
 オ三一―三七 可一・マ路四・三六 (約七・エ太八・二六 可四・サ三八・三九 太八・
 二二―二八 四六) 三九 路四・三九、 一四、一五 可一・ 一三四
 ク太四・一三を見よ ケ可一・二四を見よ 四一、八・二四 二九―三一
 (路四・二三) フ太八・二九を見よ テ路四・三二 二九―三一
 辛路四・三五、四一 ミ可五・二三を見よ (太八・四)

三〇 せしに、三〇 イエスその中を通りて去り給ふ。

三一 三二 斯てガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日ごとに人を教へ給へば、三三 人々その教に驚きあへり。その

三四 言、權威ありたるに因る。三三 會堂に穢れし惡鬼の靈に憑かれたる人あり、大聲に叫びて言ふ、三四 『ああ、ナザレの

三五 イエスよ、我らは汝となにの關係あらんや。我らを亡さんとて來給ふか。我はなんぢの誰なるを知る、神の聖者

三六 なり』三五 イエス之を禁めて言ひ給ふ、『黙せ、その人より出でよ』惡鬼その人を人々の中に倒し、傷つけずして出

三七 づ。三六 みな驚き、語り合ひて言ふ、『これ如何なる言ぞ、權威と能力とをもて命ずれば、穢れし惡鬼すら出で去

三七 る』三七 爰にイエスの噂あまねく四方の地に弘りたり。

三八 三九 イエス會堂を立ち出でて、シモンの家に入り給ふ。シモンの外姑おもき熱を患ひ居たれば、人々これが爲

三九 にイエスに願ふ。三九 その傍らに立ちて熱を責めたまへば、熱去りて女たちどころに起きて彼らに事ふ。

四〇 四〇 日のいる時さまざまの病を患ふ者をもつ人、みな之をイエスに連れ來れば、一々その上に手を置きて醫し

四一 給ふ。四一 惡鬼もまた多くの人より出でて叫びつつ言ふ、『なんぢは神の子なり』之を責めて物言ふことを免し給は

四二 ず、惡鬼そのキリストなるを知るに因りてなり。

四二 四二 明る朝イエス出でて寂しき處にゆき給ひしが、群衆たづねて御許に到り、その去り往くことを止めんとせ

四三 しに、四三 イエス言ひ給ふ、『われ又ほかの町々にも神の國の福音を宣傳へざるを得ず、わが遣されしは之が爲な

四四 り』四四 斯てユダヤの諸會堂にて教を宣べたまふ。

第五章

一 群衆おし迫りて神の言を聞きをる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、二渚に二艘の舟の寄せあるを見たまふ、漁人は舟をいでて網を洗ひ居たり。三イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請ひて陸より少しく押し出さしめ、坐して舟の中より群衆を教へたまふ。四語り終へてシモンに言ひたまふ『深處に乗りいだし、網を下して漁れ』五シモン答へて言ふ『君よ、われら終夜、勞したるに何をも得ざりき、然れど御言に隨ひて網を下さん』六斯て然せしに魚の夥多しき群を圍みて網裂けかかりたれば、七他の一艘の舟にをる組の者を差招きて來り助けしむ。來りて魚を二艘の舟に滿したれば、舟沈まんばかりになりぬ。八シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言ふ『主よ、我を去りたまへ。我は罪ある者なり』九これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚の夥多しきに驚きたるなり。一〇ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言ひたまふ『懼るな、なんぢ今より後、人を漁らん』二かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従へり。

三 イエス或る町に居給ふとき、視よ、全身癩病をわづらふ者あり。イエスを見て平伏し、願ひて言ふ『主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』三 イエス手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、直ちに癩病されり。四 イエス之を誰にも語らぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ『ただ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたるごとく汝の潔のために獻物して、人々に證せよ』五されど彌増々イエスの事ひろまりて、大なる群衆あるひは教を聽かんとし、或は病を醫されんとし集り來りしが、一六 イエス寂しき處に退きて祈り給ふ。

イ一・一一一 (太四・一) 路八・二二 約一一・二七 書一・二・三、ホ(約二・六、八) 七・一八 伯四二・一・一八、二〇 路一・一四四
 八一・二二 可一・一 四七 徒一三・四四 一三・二七 又太一 へ路八・二四、四五、五・二八 (太一九) ヲ利一三・四九、一四
 六一・二〇 約一・四 撒前二・一三 雅一 五・二九を見よ 九・三三、四九、一 七・一三 二九
 〇一四二 二・二二、二三 二(太一三・二) 可四・七・一三 七・一三 二九 二二 二四 可一・四〇 二一四 可一・四〇
 口可四・二四・二〇 八民三四・一一 申三 一(一) 卜母後六・九 王上一 又太四・二〇、二二 可 二一四 可一・四〇 カ太一四・二三を見よ

ヨ(可一・四五) ツ一八―二六 太九・ナ太二四・一七を見よ
 タ(太一五・二) 二一八 可二・三一 ラ(可二・四) ノ來四・二二、二三 路五・一八
 レ(路二・四六) 一二二 ム徒一四・九 弗二・八 二・二三 六五) フ二七―三九 太九・ 工路五・二一を見よ
 ソ可五・三〇 路六・ 太四・二四を見よ ウ太九・二を見よ 才徒五・三一 前六・二〇 九一―一七 可二・一 七路一五・二) 約一八・二八 路六・七
 一九、八、四六 路五・二四 井詩三二・五、一〇三 ク太四・二四を見よ ケ路七・二六 (路一・コ太九・九を見よ 四―二二 サ可二・二六 徒二三 七路一八・二一、一
 三 太九・一三を見よ

一七 或日イエス教をなし給ふとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより來りしパリサイ人、教法學者
 一八 ら、そこに坐しむたり、病を醫すべき主の能力イエスと偕にありき。一八 視よ、人々、中風を病める者を、床にの
 一九 せて擔ひきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、一九 群衆によりて擔ひ入るべき道を得ざれば、
 二〇 屋根にのぼり、瓦を取り除けて床のまま、人々の中にイエスの前に縋り下せり。二〇 イエス彼らの信仰を見て言ひ
 二一 たまふ「人よ、汝の罪ゆるされたり」二一 爰に學者・パリサイ人ら論じ出でて言ふ「瀆言をいふ此の人は誰ぞ、神
 二二 より他に誰か罪を赦すことを得べき」二二 イエス彼らの論ずる事をさとり、答へて言ひ給ふ「なにを心のうちに論
 二三 ずるか。二三 「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起きて歩め」と言ふと孰か易き、二四 人の子の地にて罪をゆるす權
 二四 威あることを、汝らに知らせん爲に」――中風を病める者に言ひ給ふ――「なんぢに告ぐ、起きよ、床をとりて
 二五 家に往け」二五 かれ立刻に人々の前にて起きあがり、臥しむたる床をとりあげ、神を崇めつつ己が家に歸りたり。
 二六 人々みな甚く驚きて神をあがめ懼に満ちて言ふ「今日われら珍しき事を見たり」
 二七 この事の後イエス出でて、レビといふ取税人の收税所に坐しをるを見て「われに従へ」と言ひ給へば、
 二八 一切を棄ておき、起ちて従へり。二九 レビ己が家にて、イエスの爲に大なる饗宴を設けしに、取税人および他の
 三〇 人々も多く、食事の席に列りゐたれば、三〇 パリサイ人および其の曹輩の學者ら、イエスの弟子たちに向ひ、咬き
 三一 て言ふ「なにゆる汝らは取税人・罪人らと共に飲食するか」三一 イエス答へて言ひたまふ「健康なる者は醫者を要
 三二 せず、ただ病ある者、これを要す。三三 我は正しき者を招かんとあらで、罪人を招きて悔改めさせんとて來れ

三三 彼らイエスに言ふ『ヨハネの弟子等は、しばしば斷食し祈禱し、パリサイ人の弟子たちも亦然するに、汝
三四 の弟子たちは、飲食するなり』三四 イエス言ひたまふ『新郎の友だち新郎と偕にをるうちは、彼らに斷食せしめ得
三五 んや。三五 然れど日來りて新郎をとられん、その日には斷食せん』三六 イエスマた譬を言ひ給ふ『たれも新しき衣を
三六 切り取りて、舊き衣を繕ふ者はあらず。もし然せば新しきものも破れ、かつ新しきものより取りたる裂も舊きも
三七 のに合はじ。三七 誰も新しき葡萄酒を、ふるき革囊に入るることは爲じ。もし然せば葡萄酒は囊をはりさき漏れ出
三七八 でて囊も廢らん。三八 新しき葡萄酒は、新しき革囊に入るべきなり。三九 誰も舊き葡萄酒を飲みてのち、新しき葡萄
酒を望む者はあらず』舊きは善し』と云へばなり』

第六章

一 イエス安息日に麥島を過ぎ給ふとき、弟子たち穂を摘み、手にて揉みつつ食ひたれば、ニパリサ
二人のうちの或者ども言ふ『なんぢらは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』三 イエス答へて言ひ給
四 ふ『ダビデその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事をすら讀まぬか。四 即ち神の家に入りて、祭司の他は
五 食ふまじき供のパンを取りて食ひ、己と偕なる者にも與へたり』五 また言ひたまふ『人の子は安息日の主たるな
り』

六 又ほかの安息日にイエス會堂に入りて教をなし給ひしに、此處に人あり、其の右の手なえたり。七 學者・
八 パリサイ人ら、イエスを訴ふる廉を見出さんと思ひて、安息日に人を醫すや否やを窺ふ。八 イエス彼らの念を知
九 りて手なえたる人に『起きて中に立て』と言ひ給へば、起きて立てり。九 イエス彼らに言ひ給ふ『われ汝らに問

イ 嬰五八・三十七 太 八・九・一五 可二・
六・一六、九・二四 二〇 路一七・三二 一八 可二・三三
可二・一八 路一八 (約一六・一六) 一八 可二・三三
二二 徒一三・二三 二八 又利二四・五、九
口 約三・二九 水 太九・一六、一七 可 卜申二三・二五
ル 弗一・二二 四、一四、一
チ 出二〇・一〇 又太 九・一四 可三・一
一 二・二を見よ 九・一四 可三・一
リ 母前二一・三、一六 一六
ワ 路六・一、一三、一
カ 太四・二三を見よ
ヨ 可三・二を見よ
タ 太九・四を見よ

レ何六・六
 ソ可三・五
 ツ特二・二、二
 ネ太六・六、一四・二
 三 路五・一六、九
 二八(路九・二八)
 ナ太五・二を見よ

ラ一三一・一六太一〇
 二一四可三・一六
 一九徒一・一三
 ム可六・三〇を見よ
 ウ約一・四二
 井太九・九を見よ
 ノ可三・一八

オ詩四一・九約壹二・
 一九
 ク(路六・一二)
 ヤ太四・二五 可三・
 七、八
 マ太二一・二二を見よ
 ケ詩一〇三・三

フ路五・一七を見よ
 コ可三・一〇(太九・
 二一、一四・三六)
 エ(太五・二二)
 テ二〇一・二三(太五・
 三一・二二)
 ア太一・五雅二・五
 ミ約一六・二〇、二二

サ太五・三を見よ
 キ賽五五・一、六五・
 一三 太五・六
 ユ詩一〇七・九
 メ賽六一・三 歌二一
 四

シ路一五・一九約一
 七・一四 提後三・一
 二 彼前二・一九、
 三・一四
 エ(約九・二二、一六・
 二)

ト彼前四・二四
 七徒五・四一西一・二
 四 雅一・二
 七馬四・二
 ス王上一九・一 徒七
 五・一
 イ磨六・一

ロ路二二・一五一一
 雅五・一六(路
 一六・二五)

〇 はん、安息日に善をなすと悪をなすと、生命を救ふと亡すと、孰かよき』〇かくて一同を見まはして、手なえた

二 人にて『なんぢの手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ然なしたれば、その手癒ゆ。二然るに彼ら狂氣の如くなりて、

イエスに何をなさんと語り合へり。

三 その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明したまふ。三夜明になりて弟子たちを呼び寄せ、

四 その中より十二人を選びて、之を使徒と名づけたまふ。四即ちペテロと名づけ給ひしシモンと其の兄弟アンデレ

五 と、ヤコブとヨハネと、ピリポとバルトロマイと、一五 マタイとトマスと、アルパヨの子ヤコブと熱心黨と呼ぶる

一七六 るシモンと、一六 ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダとなり。このユダはイエスを賣る者となりたり。一七 イエス

此等とともに下りて、平かなる處に立ち給ひしに、弟子の大なる群衆およびユダヤ全國、エルサレム又ツロ、シ

一八 ドンの海邊より來りて或は教を聽かんとし、或は病を醫されんとする民の大なる群も、そこにあり。一八穢れし靈

一九 に惱まれたる者も醫さる。一九能力イエスより出でて、凡ての人を醫せば、群衆みなイエスに觸らん事を求む。

二〇 二〇イエス目をあげ弟子たちを見て言ひたまふ『幸福なるかな、貧しき者よ、神の國は汝らの有なり。三幸福なる

二一 哉、いま飢うる者よ、汝ら飽くことを得ん。幸福なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん。三三人なんぢらを

二二 憎み、人の子のために遠ざけ誇り汝らの名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。三三 その日には、喜び躍れ。視

二四 よ、天にて汝らの報は大なり、彼らの先祖が預言者たちに爲ししも、斯くありき。三四 されど禍害なるかな、富む

二五 者よ、汝らは既にその慰安を受けたり。二五 禍害なる哉、いま飽く者よ、汝らは飢ゑん。禍害なる哉、いま笑ふ者

二六 よ、汝らは悲しみ泣かん。二六 凡ての人、なんぢらを譽めなば、汝ら禍害なり。彼らの先祖が虚偽の預言者たちに

爲ししも、斯くありき。

二七 二七 われ更に汝ら聴くものに告ぐ、なんぢらの仇を愛し汝らを憎む者を善くし、二八 汝らを詛ふ者を祝し、汝ら

二九 を辱しむる者のために祈れ。二九 なんぢの頬を打つ者には、他の頬をも向けよ。なんぢの上衣を取る者には下衣を

三〇 も拒むな。三〇 すべて求むる者に與へ、なんぢの物を奪ふ者に復索むな。三一 なんぢら人に爲られんと思ふごとく人

三二 にも然せよ。三二 なんぢら己を愛する者を愛せばとて、何の嘉すべき事あらん、罪人にも己を愛する者を愛する

三三 なり。三三 汝等おのれに善をなす者に善を爲すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人にも然するなり。三四 なんぢら

三四 得る事あらんと思ひて人に貸すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人にも均しきものを受けんとて罪人に貸すな

三五 り。三五 汝らは仇を愛し、善をなし、何をも求めずして貸せ、然らば、その報は大ならん。かつ至高者の子たるべ

三六 し。至高者は恩を知らぬもの、悪しき者にも仁慈あるなり。三六 汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。

三七 人を審くな、然らば汝らも審かるる事あらじ。人を罪に定むな、然らば汝らも罪に定めらるる事あらじ。人を

三八 赦せ、然らば汝らも赦されん。三八 人に與へよ、然らば汝らも與へられん。人は量をよくし、押し入れ、揺り入れ

溢るるまでにして、汝らの懐中に入れん。汝等おのが量る量にて量らるべし』

三九 また譬にて言ひたまふ「盲人は盲人を手引するを得んや、二人とも穴に落ちざらんや。四〇 弟子はその師に

イ(太六・二、一六・二) 二雅四・九を見よ 四四 路六・三五 又二九、三〇 太五・三 七太七・二二 二五 路六・三〇
五 路一六・二五 ホ約一五・一九 雅四 四四 路一・二七—二二 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ロ伯二〇・五 四 約四・五 手羅二二・二四 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ハ 路一四・一三 弗五 八太七・一五を見よ 路二二・三四 徒七 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
四 出二三・四、五 大五 六〇 二六 二六 夕詩三七・二六、一一 太七、 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ウ太五・四六 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
カ太五・四二 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ヨ路六・二七 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ツ太五・四八 九一四二 二五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ネ三七・四二 太七、 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ウ詩七九・一二 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四
ク太一〇・二四を見よ 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四 一五 路一・三二を見よ 一五 路一・三四

ヤ太五・四八
 マ太七・三
 ケ耶一七・九
 フ彼一八・一七を見よ
 照二・二・二二
 コ四三・四四
 一六・一八・二〇
 エ太七・一六を見よ
 テ彼一〇・二〇・二二
 太二・三・三五
 弗四
 六(馬一・六 加六
 二二・二二
 二二九
 ア太三・二六
 サ太二・三四を見よ
 キ太七・二二 多一・一
 六(馬一・六 加六
 二二・二二
 二七
 ユ四七・四九
 太七
 二四・二七
 一
 二一
 シ結一三・一一・一六
 哥前三・一三・一四
 工彼後一・一〇 猶一四
 ス(太七・二八)
 二七
 ヒ西二・七
 二〇
 一三
 一〇
 一五
 一〇
 一五
 一〇
 一五

四一 勝らず、凡そ全うせられたる者は、その師の如くならん。四一 何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、己が目にある梁木を認めぬか。四二 おのが目にある梁木を見ずして争で兄弟に向ひて「兄弟よ、汝の目にある塵を取り除かせよ」といふを得んや。偽善者よ、先づ己が目より梁木を取り除け。さらば明かに見えて兄弟の目にある塵を取りのぞき得ん。四三 悪しき果を結ぶ善き樹はなく、また善き果を結ぶ悪しき樹はなし。四四 樹はおのおの其の果によりて知らる。茨より無花果を取らず、野荊より葡萄を收めざるなり。四五 善き人は心の善き倉より善きものを出し、悪しき人は悪しき倉より悪しき物を出す。それ心に満つるより、口は物言ふなり。

四六 なんぢら我を「主よ主よ」と呼びつつ何ぞ我が言ふことを行はぬか。四七 凡そ我にきたり我が言を聴きて行ふ者は、如何なる人に似たるかを示さん。四八 即ち家を建つるに地を深く掘り岩の上に基を据ゑたる人のごとし。四九 洪水いでて流その家を衝けども動かすこと能はず、これ固く建られたる故なり。四九 されど聴きて行はぬ者は、基なくして家を土の上に建てたる人のごとし。流その家を衝けば、直ちに崩れて、その破壊、甚だし』

第七章

一 イエス凡て此らの言を民に聞かせ終へて後、カペナウムに入り給ふ。
 二 時に或る百卒長、その重んずる僕やみて死ぬばかりなりしかば、イエスの事を聴きて、ユダヤ人の長老たちを遣し、來りて僕を救ひ給はんことを願ふ。四 彼らイエスの許にいたり、切に請ひて言ふ「かの人は、此の事を爲らるるに相應し。五 わが國人を愛し、我らのために會堂を建てたり」六 イエス共に往き給ひて、その家はや程近くなりしとき、百卒長、數人の友を遣して言はしむ「主よ、自らを煩はし給ふな。我は汝を

七 わが屋根の下に入れまするに足らぬ者なり。七されば御前に出づるにも相應しからずと思へり、ただ御言を賜ひ
 八 て我が僕をいやし給へ。八我みづから權威の下に置かるる者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「往け」と
 九 言へば往き、彼に「來れ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」と言へば爲すなり」九イエス聞きて彼を怪し
 一〇 み振反りて、從ふ群衆に言ひ給ふ「われ汝らに告ぐ、イスラエルの中にだに斯るあつき信仰は見しことなし」

二〇 遣されたる者ども家に歸りて、僕を見れば、既に健康となれり。
 二一 二その後イエス、ナインといふ町にゆき給ひしに弟子たち及び大なる群衆も共に往く。二町門に近づき給
 二三 ふとき、視よ、昇き出さるる死人あり。これは獨息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これに伴ふ。二三主、
 二四 寡婦を見て、憫み「泣くな」と言ひて、二四近より柩に手をつけ給へば、昇くもの立ち止る。イエス言ひたまふ

二五 「若者よ、我なんぢに言ふ、起きよ」二五死人、起きかへりて物言ひ始む。イエス之を母に付したまふ。二六人々
 二七 みな懼をいだき、神を崇めて言ふ「大なる預言者、われらの中に興れり」また言ふ「神その民を顧み給へり」二七
 二八 この事ユダヤ全國および最寄の地に徧くひろまりぬ。

二九 一八 諸ヨハネの弟子たち、凡て此等のことを告げたれば、一九ヨハネ兩三人の弟子を呼び、主に遣して言はしむ
 三〇 「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」三〇彼ら御許に到りて言ふ「バプテスマのヨハネ、我らを遣して
 三一 言はしむ「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」三二この時イエス多くの者の病・疾患を醫し、惡しき靈
 三三 を逐ひだし、又おほくの盲人に見ることを得しめ給ひしが、三三答へて言ひたまふ「往きて汝らが見聞せし所を

イ燈三九・二三 一・一、三九、一三、三四 約四・一、六 四〇) リ太二一・二一を見よ、チ一八・三五、二一 申一八・一五、一八 レ太二一・四
 口太八・二〇 (路七、 四一、四二、一三、二二、三三、一一、二二、二二) (路七・三九) 二一九 伍九・二四、二六 伍九・九、約六・一四
 五〇) 一五、一七、五、六、二六、二九、三六、約一 七、約一、二、四、四 又出四・三一 路一、 七、路七・一三を見よ 路九・九、約六・一四
 八路七・一九、一〇、 一八、六、一九、八、三三、三五、 六八、 力創三・一五、四九、 ヨ可三・一〇を見よ 路太九・三〇 (賽三五、
 一、四〇、四一、一、 二二、六一、二四、 路八・五四 (徒九、 七、太九・二六を見よ、 一〇、民二四・二七、 夕太四・二三を見よ、 五、六、四二、七、

ヲ太一五・三〇・三一
 雅二・五 (詩八八・ 井太二一・七
 一〇 賽六一・二) ノ (弗四・一四)
 ヲ太九・二四・二五
 五七 約六・六六 ク馬三・一太二・一
 哥前二・二三 〇可一・二 路一
 路四・一六一・二
 一五一一七
 ヤ路七・三五・一八
 一三 羅三・四
 徒一八・二五・一九
 徒二〇・二七 提前
 二・三四
 ケ太三・六 路三・二二
 (太二一・三二)
 路一・二五
 太九・二〇・二一
 二六・七 可二・二五
 路五・二九・七三
 六 約二・二・一二
 六 約二・二・一二
 ユ路一・三七・一四
 六 約二・二・一二
 ユ路一・三七・一四
 六 約二・二・一二
 ユ路一・三七・一四
 六 約二・二・一二
 ユ路一・三七・一四

ヨハネに告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。三三 おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』

二四 ヨハネの使の去りたる後、ヨハネの事を群衆に言ひいで給ふ『なんぢら何を眺めんとて野に出でし、風にそよぐ葦なるか。二五 然らば何を見んとて出でし、柔かき衣を着たる人なるか。視よ、華美なる衣をきて奢り暮す者は王宮に在り。二六 然らば何を見んとて出でし、預言者なるか。然り我なんぢらに告ぐ、預言者よりも勝る者なり。二七 視よ、わが使を汝の顔のまへに遣す。かれは汝の前に汝の道をそなへん』と録されたるは此の人なり。

二八 われ汝らに告ぐ、女の産みたる者の中、ヨハネより大なる者はなし。然れど神の國にて小き者も、彼よりは大なり。二九 (凡ての民これを聞きて、取税人までも神を正しとせり。ヨハネのバプテスマを受けたるによる。三〇 然れどパリサイ人・教法師らは、其のバプテスマを受けざりしにより、各自にかかはる神の御旨をこばみたり) 三二 然れば、われ今の代の人を何に比へん。彼らは何に似たるか。三三 彼らは童、市場に坐し、たがひに呼びて『われら汝らの爲に笛吹きたれど、汝ら躍らず。歎きたれど、汝ら泣かさりき』と云ふに似たり。三三 それはバプテスマのヨハネ來りて、パンをも食はず、葡萄酒をも飲まねば『悪鬼に憑かれたる者なり』と汝ら言ひ、三四 人の子きたりて飲食すれば『視よ、食を貪り、酒を好む人、また取税人・罪人の友なり』と汝ら言ふなり。三五 然れど智慧は己が凡ての子によりて正しとせらる』

三六 爰に或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給ふ。三七 視

三六 爰に或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給ふ。三七 視

よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席に給ふを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、三八泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひ、また御足に接吻して香油を抹れり。三九イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言ふ『この人もし預言者ならば觸る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』四〇イエス答へて言ひ給ふ『シモン、我なんぢに言ふことあり』シモンいふ『師よ言ひたまへ』四一『或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、四二償ひかたなければ、債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛すること孰か多き』四三シモン答へて言ふ『われ思ふに、多く免されたる者ならん』イエス言ひ給ふ『なんぢの判断は當れり』四四斯て女の方に振向きてシモンに言ひ給ふ『この女を見るか。我なんぢの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へず、此の女は涙にて我が足を濡し、頭髮にて拭へり。四五なんぢは我に接吻せず、此の女は我が足に香油を抹れり。四六が足に接吻して止まず。四六なんぢは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。四七この故に我なんぢに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し』四八遂に女に言ひ給ふ『なんぢの罪は赦されたり』四九同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言ひ出づ。五〇爰にイエス女に言ひ給ふ『なんぢの信仰、なんぢを救へり、安らかに往け』

第八章

一この後イエスを教を宣べ、神の國の福音を傳へつつ、町々村々を廻り給ひしに、十二弟子も伴ふ。二また前に悪しき靈を逐ひ出され、病を醫されなどせし女たち、即ち七つの悪鬼のいでしマグダラ

イ太二六・七
口路一五・二
ハ路七・二六
一・九
二察六五・五
路一八
ト太一八・二五

ホ路二三・四
ヘ太一八・二八
可六
・三七
ト太一八・二五

チ路三二・一五、一
リ路前一五・九、一〇
一九・二二
提前五
（母後二二・二〇）
ヨ路二・四
太九・二二
可一〇・五二
路一
八・四二
弗二・八
タ可五・三四
を見よ
（路五・一）
本約一九・二五

ル路三三・四
丹後一
ワ察一・一八、五五・七
哥前六・九、一一
タ可五・三四
を見よ
（路五・一）
本約一九・二五

ル路三三・四
丹後一
ワ察一・一八、五五・七
哥前六・九、一一
タ可五・三四
を見よ
（路五・一）
本約一九・二五

ナ太一四・一を見よ 井四四・三 一〇一・二〇 フ彼四・八 結三三・三一・三二 ア提後四・一〇 約壹 キ羅二・七 來一〇・三
 ラ太二〇・八 ノ創二六・二二 ヤ太一三・一一を見よ コ來二・二 雅一・二 加四・一五 二・二五 一七 六雅五・一〇・一一
 ム路二四・一〇 オ太一一・二五を見よ マ太一三・一四を見よ 三、二四 テ何六・四 可六・二〇 サ詩六二・二〇 太六 二詩一・三 約一五・
 ウ四一八 太一三・二 ク九一五 太一三・ 西一・六 雅一・二二 エ詩一〇六・一二、一 弗三・二七 約壹二 二四 可一〇・二三 五、八 加五・二二、
 一 九 可四・一一九 一〇一・二三 可四・ 彼前二・二三 三 雅五八・二一四 徒五・一一一〇 二三四一・六、一〇 シ太一三・一二を見よ

三 と呼ばれるるマリヤ、三へロデの家司クーザの妻ヨハンナ及びスザンナ、此の他にも多くの女、ともなひゐて其の財産をもて彼らに事へたり。

五四 大なる群衆むらがり町々の人、みもとに寄り集ひたれば、譬をもて言ひたまふ、五「種播く者その種を播かんとて出づ。播くとき路の傍らに落ちし種あり、踏みつけられ、又その鳥これを啄む。六岩の上に落ちし種あり、生え出でたれど潤澤なきによりて枯る。七茨の中に落ちし種あり、茨も共に生え出でて之を塞ぐ。八良き地に落ちし種あり、生え出でて百倍の實を結べり」これらの事を言ひて呼はり給ふ「きく耳ある者は聴くべし」

一九 弟子たち此の譬の如何なる意なるかを問ひたるに、一〇イエス言ひ給ふ「なんぢらは神の國の奥義を知ることを許されたれど、他の者は譬にてせらる。彼らの見て見ず、聞きて悟らぬ爲なり。二譬の意は是なり。種は神の言なり。三路の傍らなるは、聴きたるのち、悪魔きたり、信じて救はるる事のなからんために御言をその心より奪ふ所の人なり。三岩の上なるは聴きて御言を喜び受くれども、根なければ、暫く信じて嘗試のときに退く所の人なり。四茨の中に落ちしは、聴きてのち、過るほどに世の心勞と財貨と快樂とに塞がれて實らぬ所の人なり。五良き地なるは、御言を聴き、正しく善き心にて之を守り、忍びて實を結ぶ所の人なり。

一六 誰も燈火をともし器にて覆ひ、または寢臺の下におく者なし、入り来る者のその光を見んために之を燈臺の上に置くなり。一七それ隠れたるもの顯れぬはなく、秘めたるもの知られぬはなく、明かにならぬはなし。

一八 然れば汝ら聴くこと如何と心せよ、誰にても有てる人は、なほ與へられ、有たぬ人は、その有てりと思ふ物を

も取らるべし』

一九 さてイエスの母と兄弟と來りたれど、群衆によりて近づくこと能はず。二〇 或人イエスに『なんぢの母と兄

弟と汝に逢はんとて外に立つ』と告げたれば、二一 答へて言ひたまふ『わが母、わが兄弟は、神の言を聴き、かつ

行ふ此らの者なり』

二三 或日イエス弟子たちと共に舟に乗りて『みづうみの彼方にゆかん』と言ひ給へば、乃ち船出す。二三 渡るほ

どにイエス眠りたまふ。颶風みづうみに吹き下し、舟に水満ちんとして危かりしかば、二四 弟子たち御側により、

呼び起して言ふ『君よ、君よ、我らは亡ぶ』イエス起きて風と浪とを禁め給へば、共に鎮まりて風となりぬ。

二五 斯て弟子たちに言ひ給ふ『なんぢらの信仰いづこに在るか』かれら懼れ怪しみて互に言ふ『こは誰ぞ、風と水

とに命じ給へば順ふとは』

二六 遂にガリラヤに對へるゲラセネ人の地に著く。二七 陸に上りたまふ時、その町の人にて悪鬼に憑かれたる者

きたり遇ふ。この人は久しきあひだ衣を著ず、また家に住まずして墓の中にもたり。二八 イエスを見てさげび、御

前に平伏して大聲にいふ『至高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、願くは我を苦しめ給ふな』二九 これ

はイエス穢れし靈に、この人より出で往かんことを命じ給ひしに因る。この人けがれし靈にしばしば拘へられ、

鏈と足械とにて繋ぎ守られたれど、その繋をやぶり、悪鬼に逐はれて、荒野に往けり。三〇 イエス之に『なんぢの

名は何か』と問ひ給へば『レギオン』と答ふ、多くの悪鬼その中に入りたる故なり。三一 彼らイエスに底なき所に

イ一九—二二 太二二 八二—二五 太八 一〇七—二二 詩四六・一二 賽 一一—七 黙九

四六一—五〇 可三 二二—二七 可四 七 一、二、一一、一一

三一一—三五 三六一—四一 へ路五・五を見よ ヌ詩八九・九 七、一七・八、二〇

口路一一・二八 約一 二路五・二を見よ 路 卜路四・三九を見よ ル二六—三七 太八 力猶六 黙二〇・一〇 二、三

四・二二 八・三三 子詩一〇七・二九 二八—三四 可五 三(六二六・五三)

レ(伯一・二〇一) ヲ太四・二四を見よ 井藤一・二三
 ヲ(伯二・二四) ヲ(伯二・二四) 徒ノ詩三二六、七二・
 ツ路八・二二 (一六・三九) 一八 加一・二三、ク四一―五六 太九・
 一八―二六 可五・ 二四 提前一・二三 一八―二六 可五・
 二二―四三
 ナ(路一〇・三九) 一八―二〇 一六 二二―四三
 ケ可一・二四四を見よ

三三 往くを命じ給はざらんことを請ふ。三三 彼處の山に、多くの豚の一群、食し居たりしが、悪鬼ども其の豚に入るを

三三 許し給はんことを請ひたれば、イエス許し給ふ。三三 悪鬼、人を出でて豚に入りたれば、その群、崖より湖水に駈

三四 け下りて溺れたり。三四 飼ふ者ども此の起りし事を見て逃げ往きて、町にも里にも告げたれば、三五 人々ありし事を

三三 見んとて出で、イエスに來りて悪鬼の出でたる人の、衣服をつけ、慥なる心にて、イエスの足下に坐しをるを見

三七 懼れあへり。三六 かの悪鬼に憑かれたる人の救はれし事柄を見し者ども之を彼らに告げたれば、三七 ガラセネ地方

三五 九八 の民衆、みなイエスに出で去り給はんことを請ふ。これ大に懼れたるなり。爰にイエス舟に乗りて歸り給ふ。

三八 時に悪鬼の出でたる人、ともに在らんことを願ひたれど、之を去らしめんとて、三九 言ひ給ふ『なんぢの家に歸

りて、神が如何に大なる事を汝になし給ひしかを具に告げよ』彼ゆきて、イエスの如何に大なる事を、己になし

給ひしかを徧くその町に言ひ弘めたり。

四一〇 斯てイエスの歸り給ひしとき、群衆これを迎ふ、みな待ちゐたるなり。四一 視よ、會堂司にてヤイロといふ

四二 者あり、來りてイエスの足下に伏し、その家にきたり給はんことを願ふ。四二 おほよそ十二歳ほどの一人娘ありて

死ぬばかりなる故なり。イエスの往き給ふとき、群衆かこみ塞がる。

四三 爰に十二年このかた血漏を患ひて醫者の爲に己が身代をことごとく費したれども、誰にも癒され得ざりし

四四 女あり。四四 イエスの後に來りて、御衣の總にさはりたれば、血の出づること立刻に止みたり。四五 イエス言ひ給ふ

『我に觸りしは誰ぞ』人みな否みたれば、ペテロ及び共にをる者ども言ふ『君よ、群衆なんぢを圍みて押し迫る

四六 なり』四六 イエス言ひ給ふ『われに觸りし者あり、能力の我より出でたるを知る』四七 女おのが隠れ得ぬことを知
 四八 り、戦き來りて御前に平伏し、觸りし故と立刻に癒えたる事を、人々の前にて告ぐ。四八 イエス言ひ給ふ『むす
 四九 めよ、汝の信仰なんぢを救へり、安らかに往け』

四九 四九 かく語り給ふほどに、會堂司の家より人きたりて言ふ『なんぢの娘は早や死にたり、師を煩はすな』五〇 イ
 五〇 エス之を聞きて會堂司に答へたまふ『懼るな、ただ信ぜよ。さらば娘は救はれん』五一 イエス家に到りて、ペテ
 五二 ロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の父母の他は、ともに入ること誰にも許し給はず。五二 人みな泣き、かつ子のために
 五三 歎き居たりしが、イエス言ひたまふ『泣くな。死にたるにあらず、寝ねたるなり』五三 人々その死にたるを知れば、
 五四 イエスを嘲笑ふ。五四 然るにイエス子の手をとり、呼びて『子よ、起きよ』と言ひ給へば、五五 その靈かへりて立刻
 五六 に起く。イエス食物を之に與ふことを命じ給ふ。五六 その兩親おどろきたり。イエス此の有りし事を誰にも語ら
 五七 ぬやうに命じ給ふ。

第九章

一 イエス十二弟子を召し寄せて、もろもろの悪鬼を制し、病をいやす能力と權威とを與へ、ニまた
 二 神の國を宣傳へしめ、人を醫さしむる爲に之を遣さんとして言ひ給ふ、三 旅のために何をも持つ
 三 な、杖も袋も糧も銀も、また二つの下衣をも持つな。四 いづれの家に入るとも、其處に留れ、而して其處より立
 四 ち去れ。五 人もし汝らを受けずば、その町を立ち去るとき證のために足の塵を拂へ』六 爰に弟子たち出でて村々
 五 を歴巡り徧く福音を宣傳へ、醫すことを爲せり。

イ路五・一七を見よ ホ路八・四一 一五 可六・八一 三六 八(路三三・三五、タ可六・一二路八・一
 口察六六・二 へ可五・三六 四三 一一(路一〇・四一 三六) 三六 二一(路一〇・四一 可六
 八六九・二二を見よ ト太一・一七 路二 又太八・四を見よ 一一(路一〇・四一 可六
 (徒一四・九) 三・二七 ル太一〇・五可六・七 一二(路一〇・四一 可六
 二可五・三四を見よ チ約一一・一一、一三 テ(太一〇・七) カ太一〇・一〇 可六 徒二三・五一

レ七一九 太一四・一、ナ路二三・八
 二可六・一四、一五、ヲ可六・三〇
 太一四・一を見よ ム一〇一七 太一四 井可六・三九
 ツ太一四・二を見よ ・三三二二 可六 ノ太一四・二〇を見よ ・二二、九二八
 太一六・一四を見よ ・三二一四四 約六 オ一八二〇 太一六 ヤ(約六・六八、六九)

七 七 さて國守へロデ、ありし凡ての事をききて周章てまどふ。或人はヨハネ死人の中より甦へりたりといひ、
 九八 或人はエリヤ現れたりといひ、また或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言へばなり。九へロデ言ふヨハ

ネは我すでに首斬りたり、然るに斯る事のきこゆる此の人は誰なるか』かくてイエスを見んことを求めむたり。
 一〇 使徒たち歸りきて、其の爲しし事を具にイエスに告ぐ。イエス彼らを携へて窃にベツサイダといふ町に退

きたまふ。二 然れど群衆これを知りて従ひ來りたれば、彼らを接けて、神の國の事を語り、かつ治療を要する人
 人を醫したまふ。三 日傾きたれば、十二弟子きたりて言ふ『群衆を去らしめ、周圍の村また里にゆき、宿をとり

て、食物を求めさせ給へ。我らは斯る寂しき處に居るなり』三 イエス言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子た
 ち言ふ『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、此の多くの人のために、往きて買はねば他に食物な

し』四 男おほよそ五千人ゐたればなり。イエス弟子たちに言ひたまふ『人々を組にして五十人づつ坐せしめよ』
 一五 彼等その如くなして、人々をみな坐せしむ。一六 斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、

擘きて弟子たちに付し、群衆のまへに置かしめ給ふ。一七 彼らは食ひて皆飽く。擘きたる餘を集めしに十二筐ほど
 ありき。

一八 一八 イエス人々を離れて祈り居給ふとき、弟子たち偕にをりしに問ひて言ひたまふ『群衆は我を誰といふか』
 一九 答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言ふ』二〇 イエス

言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へて言ふ『神のキリストなり』二一 イエス彼らを戒めて、之を誰

三二にも告げぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ。三三「人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、
 三三かつ殺され、三日めに甦へるべし」三三また一同の者に言ひたまふ。「人もし我に従ひ來らんと思はば、己をすて、
 三四日々おのが十字架を負ひて我に従へ。三四己が生命を救はんと思ふ者は之を失ひ、我がために己が生命を失ふその
 三五人は之を救はん。三五人、全世界を贏くとも己をうしなひ己を損せば、何の益あらんや。三六我と我が言とを恥づる
 三七者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの榮光をもて來らん時に恥づべし。三七われ實をもて汝らに告
 ぐ、此處に立つ者のうちに、神の國を見るまでは、死を味はぬ者どもあり」
 三八 二八これらの言をいひ給ひしのうち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登
 三九り給ふ。三九かくて祈り給ふほどに、御顔の状かはり、其の衣白くなりて輝けり。三〇視よ、二人の人ありてイエス
 三一と共に語る。これはモーセとエリヤとにて、三一榮光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去の
 三二ことを言ひわたるなり。三二ペテロ及び偕にをる者いたく睡氣ざしたれど、目を覺してイエスの榮光および偕に立
 三三つ二人を見たり。三三二人の者イエスと別れんとする時、ペテロ、イエスに言ふ「君よ、我らの此處に居るは善し、
 三三我ら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの爲にせん」彼は言ふ所を知らざり
 三四き。三四この事を言ひ居るほどに、雲おこりて彼らを覆ふ。雲の中に入りしとき、弟子たち懼れたり。三五雲より聲
 三六出でて言ふ「これは我が選びたる子なり、汝ら之に聽け」三六聲出でしとき、唯イエスひとり見え給ふ。弟子たち
 黙して、見し事を何一つ其の頃たれにも告げざりき。

イ二二—二七 太一六 八六—一〇・三八を見よ ト太一六・二八 又路三・二二、五・一、ワ彼後一・一五 九、一〇
 二二—二八 可八 二六—一〇・三九を見よ チ二八—三六 太一七 六、六・二二、九、カ太二六・四三 可一 九、一〇
 三二—三九 一 ホ來一〇・三四 一八 四・四〇 四・四〇 四・四〇 四・四〇 四・四〇 四・四〇 四・四〇 四・四〇
 口太一六・二二を見よ へ(太一〇・三三) 路 八 一八 路(五・二) 路 三 路(五・五)を見よ 路 三 路(五・五)を見よ 路
 路九・四四 一二・九 一七・一を見よ 路(可一六・二二) 九・四九 九・四九 九・四九 九・四九 九・四九 九・四九 九・四九 九・四九

ナ三七—四二 太一七
 ・二四—一八 可九
 ・一四—二七
 ラ彼後一・一六
 ム四三—四五 太一七
 ・二二—二三 可九
 ・一五—可九・三三
 一三七
 三〇—三二
 ウ路九・二二
 井可九・三二を見よ
 ノ四六—四八 太一八
 ヤ路二二・二六
 フ太二・三〇を見よ
 ・一五—可九・三三
 マ四九、五〇 可九
 三八—四〇
 ケ路五・五を見よ 路
 エ(路一三・二二—一七
 ・二一、一八・三一、
 一九・二一、二八)

三七 次の日、山より下りたるに、大なる群衆イエスを迎ふ。三八 視よ、群衆のうちの或人さけびて言ふ「師よ、

三九 願くは我が子を顧みたまへ、之は我が獨子なり。三九 視よ、靈の憑くときは俄に叫ぶ、痙攣けて沫をふかせ、甚く

四〇 害ひ、漸くにして離るるなり。四〇 御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど、能はざりき」四一 イエス答へて言

ひ給ふ「ああ信なき曲れる代なる哉、われ何時まで汝らと偕にをりて、汝らを忍ばん。汝の子をここに連れ來れ」

四二 乃ち來るとき、惡鬼これを打ち倒し、甚く痙攣けさせたり。イエス穢れし靈を禁め、子を醫して、その父に付

四三 したまふ。四三 人々みな神の稜威に驚きあへり。

四四 人々みなイエスの爲し給ひし凡ての事を怪しめる時、イエス弟子たちに言ひ給ふ、四四 これらの言を汝らの

四五 耳にをさめよ。人の子は人々の手に付さるべし」四五 かれら此の言を悟らず、辨へぬやうに隠されたるなり。また

此の言につきて問ふことを懼れたり。

四六 爰に弟子たちの中に、誰か大ならんとの爭論おこりたれば、四七 イエスその心の爭論を知りて、幼兒をとり

四八 御側に置きて言ひ給ふ、四八「おほよそ我が名のために此の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、

我を遣しし者を受くるなり。汝らの中に最も小き者は、これ大なるなり」

四九 ヨハネ答へて言ふ「君よ、御名によりて惡鬼を逐ひいだす者を見しが、我等とともに従はぬ故に、之を止

五〇 めたり」五〇 イエス言ひ給ふ「止むな。汝らに逆はぬ者は、汝らに附く者なり」

五一 イエス天に擧げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、五二 己に先だちて

五三 使を遣したまふ。彼ら往きてイエスの爲に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、
 三四 ムに向ひて往き給ふさまなるが故に、イエスを受けず。弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言ふ「主よ、我ら
 五五 が天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給ふか」
 五六 イエス顧みて彼らを戒め、遂に相共に他の村に往きたまふ。

五七 途を往くとき、或人イエスに言ふ「何處に往き給ふとも我は従はん」
 五八 イエス言ひたまふ「狐は穴あり、空の鳥は罌あり、されど人の子は枕する所なし」
 五九 また或人に言ひたまふ「我に従へ」かれ言ふ「まづ往きて我が父を葬ることを許し給へ」
 六〇 イエス言ひたまふ「死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の國を言ひ弘めよ」
 六一 また或人いふ「主よ、我なんぢに従はん、然れど先づ家の者に別を告ぐることを許し給へ」
 六二 イエス言ひたまふ「手を鋤につけてのち、後を顧みる者は、神の國に適ふ者にあらず」

第一〇章

一 この事ののち、主、ほかに七十人をあげて、自ら往かんとする町々處々へ、おのれに先立ち二人
 二 づつを遣さんとして言ひ給ふ、「収穫はおほく、労働人は少し。この故に収穫の主は労働人をその
 三 収穫場に遣し給はんことを求めよ。往け、視よ、我なんぢらを遣すは、羔羊を豺狼のなかに入るるが如し。
 四 財布も袋も鞋も携ふな。また途にて誰にも挨拶すな。孰の家に入るとも、先づ平安この家にあれと言へ。
 五 もし平安の子、そこに居らば、汝らの祝する平安はその上に留らん。もし然らずば、其の平安は汝らに歸ら
 六 ん。七 その家にとどまりて、與ふる物を食ひ飲みせよ。労働人のその値を得るは相應しきなり。家より家に移る

イ太一〇・五を見よ 二(王下一・一〇—一三) 三(三) 四(約四・三五) 五(利一九・一三—申
 (路一〇・三三—一七) 六(王下八・二〇を見よ) 七(路七・二三を見よ) 八(太一〇・二六—二七) 九(利一四・一五—太
 一〇・一五) 一〇(王上九・一—二) 一一(王上九・一—二) 一二(太一〇・一—二) 一三(王上九・一—二) 一四(王上九・一—二)
 一五(王上九・一—二) 一六(王上九・一—二) 一七(王上九・一—二) 一八(王上九・一—二) 一九(王上九・一—二)
 二〇(王上九・一—二) 二一(王上九・一—二) 二二(王上九・一—二) 二三(王上九・一—二) 二四(王上九・一—二)
 二五(王上九・一—二) 二六(王上九・一—二) 二七(王上九・一—二) 二八(王上九・一—二) 二九(王上九・一—二)
 三〇(王上九・一—二) 三一(王上九・一—二) 三二(王上九・一—二) 三三(王上九・一—二) 三四(王上九・一—二)
 三五(王上九・一—二) 三六(王上九・一—二) 三七(王上九・一—二) 三八(王上九・一—二) 三九(王上九・一—二)
 四〇(王上九・一—二) 四一(王上九・一—二) 四二(王上九・一—二) 四三(王上九・一—二) 四四(王上九・一—二)
 四五(王上九・一—二) 四六(王上九・一—二) 四七(王上九・一—二) 四八(王上九・一—二) 四九(王上九・一—二)
 五〇(王上九・一—二) 五一(王上九・一—二) 五二(王上九・一—二) 五三(王上九・一—二) 五四(王上九・一—二)
 五五(王上九・一—二) 五六(王上九・一—二) 五七(王上九・一—二) 五八(王上九・一—二) 五九(王上九・一—二)
 六〇(王上九・一—二) 六一(王上九・一—二) 六二(王上九・一—二) 六三(王上九・一—二) 六四(王上九・一—二)
 六五(王上九・一—二) 六六(王上九・一—二) 六七(王上九・一—二) 六八(王上九・一—二) 六九(王上九・一—二)
 七〇(王上九・一—二) 七一(王上九・一—二) 七二(王上九・一—二) 七三(王上九・一—二) 七四(王上九・一—二)
 七五(王上九・一—二) 七六(王上九・一—二) 七七(王上九・一—二) 七八(王上九・一—二) 七九(王上九・一—二)
 八〇(王上九・一—二) 八一(王上九・一—二) 八二(王上九・一—二) 八三(王上九・一—二) 八四(王上九・一—二)
 八五(王上九・一—二) 八六(王上九・一—二) 八七(王上九・一—二) 八八(王上九・一—二) 八九(王上九・一—二)
 九〇(王上九・一—二) 九一(王上九・一—二) 九二(王上九・一—二) 九三(王上九・一—二) 九四(王上九・一—二)
 九五(王上九・一—二) 九六(王上九・一—二) 九七(王上九・一—二) 九八(王上九・一—二) 九九(王上九・一—二)
 一〇〇(王上九・一—二)

ツ(哥前二〇・二七) ム太一〇・一五を見よ ノ太二一・二一 二二七 王下一九 三
 一、二 尼九・一帖 マ路一〇・一二 三
 一四(約)一・二・四八 撒前 九・二八 賽四・三 詩六
 二〇・二二、一五、
 路一〇・一一 二二、二四 ク太一一・二二を見よ 四・一 詩六九・一一 ケ太四・二三を見よ 四・八) 結一三・九 但一二 二二、二七
 ナ路九・五を見よ 井一三一・五太一一 ヤ前三七・三四 母後 耳一・一三 拿三・ フ太一一・二三を見よ テ可一六・一七を見よ ユ二二、二二、二七 太一一
 ラ路一〇・九 二二、二三 三・三一 王上一 五、六、八 黙一一・ コ太一〇・四〇 約一 ア太四・一〇を見よ 二・二三 黙三・五、 ヲ(約)一七・二六)

九八 な。ハ孰の町に入るとも、人々なんぢらを受けなば、汝らの前に供ふる物を食し、九其處にをる病のものを醫

一〇 し、また「神の國は汝らに近づけり」と言へ。一〇孰の町に入るとも、人々なんぢらを受けずば、大路に出でて、

二二 「我らの足につきたる汝らの町の塵をも汝らに對して拂ひ棄つ、されど神の國の近づけるを知れ」と言へ。

二三 二われ汝らに告ぐ、かの日にはソドムの方その町よりも耐へ易からん。二三禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる

哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を

一四 き、灰のなかに坐して、悔改めしならん。一四然れば審判にはツロとシドンとのかた汝等よりも、耐へ易からん。

一五 一五カペナウムよ、汝は天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。一六汝らに聽く者は我に聽くなり、汝らを棄

つる者は我を棄つるなり。我を棄つる者は我を遣し給ひし者を棄つるなり」

一七 一七七十人よろこび歸りて言ふ「主よ、汝の名によりて悪鬼すら我らに服す」一八イエス彼らに言ひ給ふ「われ

一八 天より閃く電光のごとくサタンの落ちしを見たり。一九視よ、われ汝らに蛇・蠍を踏み、仇の凡ての力を抑ふる權

二〇 威を授けたれば、汝らに害ふもの斷えてなからん。二〇然れど靈の汝らに服するを喜ぶな、汝らの名の天に録され

たるを喜べ」

二二 二二その時イエス聖靈により喜びて言ひたまふ「天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智きもの慧き

三三 者に隠して嬰兒に顯したまへり。父よ、然り、此のごときは御意に適へるなり。三三凡ての物は我わが父より委ね

られたり。子の誰なるを知る者は、父の外になく、父の誰なるを知る者は、子また子の欲するままに顯すところ

二三 者の外になし』^{二三}斯て弟子たちを顧み窃に言ひ給ふ『なんぢらの見る所を見る眼は幸福なり。二四 われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞かざりき』

二五 視よ、或る教師、立ちてイエスを試みて言ふ『師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか』

二六 イエス言ひたまふ『律法に何と録したるか、汝いかに讀むか』^{二七}答へて言ふ『なんぢ心を盡し、精神を盡し、

二八 力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし。また己のごとく汝の隣を愛すべし』^{二八}イエス言ひ給ふ『なん

二九 ぢの答は正し。之を行へ、さらば生くべし』^{二九}彼おのれを義とせんとしてイエスに言ふ『わが隣とは誰なるか』

三〇 イエス答へて言ひたまふ『或人エルサレムよりエリコに下るとき、強盜にあひしが、強盜どもその衣を剥ぎ、

三一 傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。三二 或る祭司たまたま此の途より下り、之を見てかなたを過ぎ往けり、

三三 又レビ人も此處にきたり、之を見て同じく彼方を過ぎ往けり。三三 然るに或るサマリヤ人、旅して其の許にきた

三四 り、之を見て憫み、^{三四}近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ傷を包みて己が畜にのせ、旅舎に連れゆきて介抱し、^{三五}あく

三六 日デナリ二つを出し、主人に與へて『この人を介抱せよ。費もし増さば我が歸りくる時に償はん』と云へり。

三六 汝いかに思ふか、此の三人のうち、孰か強盜にあひし者の隣となりしぞ』^{三七}かれ言ふ『その人に憐憫を施した

三六 る者なり』^{三八}イエス言ひ給ふ『なんぢも往きて其の如くせよ』

三八 斯て彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。三九 その姉妹

イ二三、二四 太二三 八二五—二八 太二二 ホ申六・五 (二八)

・二六、一七 三三四—四〇 可一 へ利一九・一八 又(馬二・七一九)

口來一・一三、三九 二・二八—三一(太 一・二九、一七を見よ) ル太一〇・五を見よ

彼前一・一〇—一二 一九・二六—一九 一六・二五 一六・二六 一六・二六

(約八・五六) 二太二二・三五を見よ 路一八・三二、一九 王上一・三三

カ太一八・二八を見よ 一二八、三〇、三九、

ヨ太五・四四 (路六、 一一二)

三—三六)

タ路一〇・四〇、四一

約一一・一五、一九

レ路一〇・四二 約一
 一・一四一、一四二
 一・一四三、一四四
 一・一四五、一四六
 一・一四七、一四八
 一・一四九、一五〇
 一・一五一、一五二
 一・一五三、一五四
 一・一五五、一五六
 一・一五七、一五八
 一・一五九、一六〇
 一・一六一、一六二
 一・一六三、一六四
 一・一六五、一六六
 一・一六七、一六八
 一・一六九、一七〇
 一・一七一、一七二
 一・一七三、一七四
 一・一七五、一七六
 一・一七七、一七八
 一・一七九、一八〇
 一・一八二、一八三
 一・一八四、一八五
 一・一八七、一八八
 一・一八九、一九〇
 一・一九二、一九三
 一・一九四、一九五
 一・一九七、一九八
 一・一九九、二〇〇
 一・二〇二、二〇三
 一・二〇四、二〇五
 一・二〇七、二〇八
 一・二〇九、二一〇
 一・二一二、二一三
 一・二一四、二一五
 一・二一七、二一八
 一・二一九、二二〇
 一・二二二、二二三
 一・二二四、二二五
 一・二二七、二二八
 一・二三〇、二三一
 一・二三二、二三三
 一・二三四、二三五
 一・二三七、二三八
 一・三三〇、三三一
 一・三三二、三三三
 一・三三五、三三六
 一・三三七、三三八
 一・三三九、三四〇
 一・三四二、三四三
 一・三四四、三四五
 一・三四七、三四八
 一・三四九、三五〇
 一・三五二、三五三
 一・三五四、三五五
 一・三五七、三五八
 一・三六〇、三六一
 一・三六二、三六三
 一・三六五、三六六
 一・三六七、三六八
 一・三六九、三七〇
 一・三七二、三七三
 一・三七四、三七五
 一・三七七、三七八
 一・三八〇、三八一
 一・三八二、三八三
 一・三八五、三八六
 一・三八七、三八八
 一・三九〇、三九一
 一・三九二、三九三
 一・三九五、三九六
 一・三九七、三九八
 一・四〇〇、四〇一
 一・四〇二、四〇三
 一・四〇五、四〇六
 一・四〇七、四〇八
 一・四一〇、四一一
 一・四一二、四一三
 一・四一四、四一五
 一・四一七、四一八
 一・四一九、四二〇
 一・四二二、四二三
 一・四二四、四二五
 一・四二七、四二八
 一・四三〇、四三一
 一・四三二、四三三
 一・四三五、四三六
 一・四三七、四三八
 一・四四〇、四四一
 一・四四二、四四三
 一・四四五、四四六
 一・四四七、四四八
 一・四五〇、四五一
 一・四五二、四五三
 一・四五五、四五六
 一・四五七、四五八
 一・四六〇、四六一
 一・四六二、四六三
 一・四六五、四六六
 一・四六七、四六八
 一・四七〇、四七一
 一・四七二、四七三
 一・四七五、四七六
 一・四七七、四七八
 一・四八〇、四八一
 一・四八二、四八三
 一・四八五、四八六
 一・四八七、四八八
 一・四九〇、四九一
 一・四九二、四九三
 一・四九五、四九六
 一・四九七、四九八
 一・五〇〇、五〇一
 一・五〇二、五〇三
 一・五〇五、五〇六
 一・五〇七、五〇八
 一・五一〇、五一一
 一・五一二、五一三
 一・五一五、五一六
 一・五一七、五一八
 一・五二〇、五二一
 一・五二二、五二三
 一・五二五、五二六
 一・五二七、五二八
 一・五三〇、五三一
 一・五三二、五三三
 一・五三五、五三六
 一・五三七、五三八
 一・五四〇、五四一
 一・五四二、五四三
 一・五四五、五四六
 一・五四七、五四八
 一・五五〇、五五一
 一・五五二、五五三
 一・五五五、五五六
 一・五五七、五五八
 一・五六〇、五六一
 一・五六二、五六三
 一・五六五、五六六
 一・五六七、五六八
 一・五七〇、五七一
 一・五七二、五七三
 一・五七五、五七六
 一・五七七、五七八
 一・五八〇、五八一
 一・五八二、五八三
 一・五八五、五八六
 一・五八七、五八八
 一・五九〇、五九一
 一・五九二、五九三
 一・五九五、五九六
 一・五九七、五九八
 一・六〇〇、六〇一
 一・六〇二、六〇三
 一・六〇五、六〇六
 一・六〇七、六〇八
 一・六一〇、六一一
 一・六一二、六一三
 一・六一五、六一六
 一・六一七、六一八
 一・六二〇、六二一
 一・六二二、六二三
 一・六二五、六二六
 一・六二七、六二八
 一・六三〇、六三一
 一・六三二、六三三
 一・六三五、六三六
 一・六三七、六三八
 一・六四〇、六四一
 一・六四二、六四三
 一・六四五、六四六
 一・六四七、六四八
 一・六五〇、六五一
 一・六五二、六五三
 一・六五五、六五六
 一・六五七、六五八
 一・六六〇、六六一
 一・六六二、六六三
 一・六六五、六六六
 一・六六七、六六八
 一・六七〇、六七一
 一・六七二、六七三
 一・六七五、六七六
 一・六七七、六七八
 一・七八〇、七八一
 一・七八二、七八三
 一・七八五、七八六
 一・七八七、七八八
 一・七九〇、七九一
 一・七九二、七九三
 一・七九五、七九六
 一・七九七、七九八
 一・八〇〇、八〇一
 一・八〇二、八〇三
 一・八〇五、八〇六
 一・八〇七、八〇八
 一・八一〇、八一
 一・八一二、八一三
 一・八一五、八一六
 一・八一七、八一八
 一・八二〇、八二一
 一・八二二、八二三
 一・八二五、八二六
 一・八二七、八二八
 一・八三〇、八三一
 一・八三二、八三三
 一・八三五、八三六
 一・八三七、八三八
 一・八四〇、八四一
 一・八四二、八四三
 一・八四五、八四六
 一・八四七、八四八
 一・八五〇、八五一
 一・八五二、八五三
 一・八五五、八五六
 一・八五七、八五八
 一・八六〇、八六一
 一・八六二、八六三
 一・八六五、八六六
 一・八六七、八六八
 一・八七〇、八七一
 一・八七二、八七三
 一・八七五、八七六
 一・八七七、八七八
 一・八八〇、八八一
 一・八八二、八八三
 一・八八五、八八六
 一・八八七、八八八
 一・八九〇、八九一
 一・八九二、八九三
 一・八九五、八九六
 一・八九七、八九八
 一・九〇〇、九〇一
 一・九〇二、九〇三
 一・九〇五、九〇六
 一・九〇七、九〇八
 一・九一〇、九一一
 一・九一二、九一三
 一・九一五、九一六
 一・九一七、九一八
 一・九二〇、九二一
 一・九二二、九二三
 一・九二五、九二六
 一・九二七、九二八
 一・九三〇、九三一
 一・九三二、九三三
 一・九三五、九三六
 一・九三七、九三八
 一・九四〇、九四一
 一・九四二、九四三
 一・九四五、九四六
 一・九四七、九四八
 一・九五〇、九五
 一・九五二、九五三
 一・九五五、九五六
 一・九五七、九五八
 一・九六〇、九六一
 一・九六二、九六三
 一・九六五、九六六
 一・九六七、九六八
 一・九七〇、九七一
 一・九七二、九七三
 一・九七五、九七六
 一・九七七、九七八
 一・九八〇、九八一
 一・九八二、九八三
 一・九八五、九八六
 一・九八七、九八八
 一・九九〇、九九一
 一・九九二、九九三
 一・九九五、九九六
 一・九九七、九九八
 一・一〇〇〇、一〇〇一

四〇。にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きをりしが、四〇。マルタ饗應のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ』^{四二}主、答へて言ひ給ふ『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思ひ煩ひて心勞す。』^{四二}されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり』

第一章

一 イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子の一人いふ『主よ、ヨハネの其の弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ』^二イエス言ひ給ふ『なんぢら祈るときに斯く言へ』^三父よ、願くは御名の崇められん事を。御國の來らん事を。^四我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給へ。我らを嘗試にあはせ給ふな。^五また言ひ給ふ『なんぢらの中たれか友あらんに、夜半にその許に往きて』^六友よ、我に三つのパンを貸せ。^六わが友、旅より來りしに、之に供ふべき物なし』^七と言ふ時、^七かれ内より答へて『われを煩はすな、戸ははや閉ぢ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し』^八といふ事ありとも、^八われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて與へねど、^九求の切なるにより、起きて其の要する程のものを與へん。^九われ汝らに告ぐ、^九求めよ、さらば與へられん。^九尋ねよ、さらば見出さん。^{一〇}門を叩け、さらば開かれん。^{一〇}すべて求むる者は得、^{一〇}尋ぬる者は見出し、^{一〇}門を叩く者は開かるるなり。^{一〇}汝等の

二三 うち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代に蛇を與へ、二三 卵を求めんに蠍を與へんや。二三 さらば汝ら
惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや」

二五 一四さてイエス啞の惡鬼を逐ひいだし給へば、惡鬼いでて啞、物言ひしにより、群衆あやしめり。一五 其の中の
或者ども言ふ「かれは惡鬼の首ベルゼブルによりて惡鬼を逐ひ出すなり」一六 また或者どもは、イエスを試みんと

一八 天よりの徴を求む。一七 イエスその思を知りて言ひ給ふ「すべて分れ争ふ國は亡び、分れ争ふ家は倒る。一八 サタ
ンもし分れ争はば、其の國いかで立つべき。汝等わが惡鬼を逐ひ出すを、ベルゼブルに由ると言へばなり。一九 我

もしベルゼブルによりて、惡鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。この故に彼らは汝らの審
判人となるべし。二〇 然れど我もし神の指によりて、惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。二一 強き

二二 物の武具をよろひて己が屋敷を守るときは、其の所有、安全なり。二三 然れど更に強きもの來りて、之に勝つとき
は、恃とする武具をことごとく奪ひて、分捕物を分たん。二三 我と偕ならぬ者は我にそむき、我と共に集めぬ者は

二四 散らすなり。二四 穢れし靈、人を出づる時は、水なき處を巡りて、休を求む。されど得ずして言ふ「わが出でし家
に歸らん」二五 歸りて其の家の掃き淨められ、飾られたるを見、二六 遂に往きて己よりも惡しき他の七つの靈を連れ

二七 きたり、共に入りて此處に住む。さればその人の後の狀は、前よりも惡しくなるなり」
二七 此等のことを言ひ給ふとき、群衆の中より或女、聲をあげて言ふ「幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんぢ

の嘔ひし乳房は」二八 イエス言ひたまふ「更に幸福なるかな、神の言を聽きて之を守る人は」二九 群衆おし集まれる

イ(路一八・七、八) 二大九・三四及び一〇 二三三—二七 五・五 一五 默二〇・二、三 四三—四五 一四 來六・四— 七詩一九・二、二太
ロ(太七・二一) 二二五を見よ ト太四・一〇を見よ 又大三・二を見よ 又太二二・三〇(太六) 夕暮前三・一六 弗三 八、一〇・二六—二

八一四、一五 太二二 ホ太二二・三八を見よ 七路一—一五 又大二六・三を見よ 二二四 二六、一七、 五 九 彼後二・二〇
・二二、二四(太九) へ一七—二二 太二二 出八・一九 申九 ヲ太五三・一二 西二 カ(哥後六・一) 一八 九路一・二八、 四八
三二—三四 二二五—二九 可三 一〇 詩八・三(但 一五 來二・一四、 三二四—二六 太二二 二レ太二二・四五 約五 (路二三・二九)

三二—三四 二二五—二九 可三 一〇 詩八・三(但 一五 來二・一四、 三二四—二六 太二二 二レ太二二・四五 約五 (路二三・二九)

二二九—三二二 太二二 ウ王上一〇・一
 三九—四二 非拿三・五—一〇
 ナ太二二・三八を見よ ノ太五・一五 可四
 ラ可八・二二 二一 路八・一六 マ詩二一九・一〇五
 ム拿一・一七、二一〇 オ三四、三五 太六 哥後四・六
 二二、二三 ケ機四・一八
 二七、二七—一九 フ(太一五・二) 可七
 三、四 一五・三六 哥前 一五
 コ路七・一三を見よ サ路二・三三 (路 ユ太二三・二三
 エ太二三・二五、二六 一六・九) ミ(采六・一八)

時、イエス言ひ出でたまふ、「今の代は邪曲なる代にして徴を求む。されどヨナの徴のほかには徴は與へられじ。

三〇 ヨナがニネベの人に徴となりし如く、人の子もまた今の代に然らん。三一 南の女王、審判のとき、今の代の人と

共に起きて、之が罪を定めん。彼はソロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る

三二 もの此處に在り。三三 ニネベの人、審判のとき、今の代の人と共に立ちて之が罪を定めん。彼らはヨナの宣ぶる言

によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。

三三 誰も燈火をともして、穴藏の中または升の下におく者なし。入り來る者の光を見んために、燈臺の上に置

三三 くなり。三四 汝の身の燈火は目なり、汝の目正しき時は、全身明からん。されど悪しき時は、身もまた暗からん。

三五 この故に汝の内の光、闇にはあらぬか、省みよ。三六 もし汝の全身明くして暗き所なくば、輝ける燈火に照さる

三六 如く、その身全く明からん

三七 イエスの語り給へるとき、或パリサイ人その家にて食事し給はん事を請ひたれば、入りて席に著きたま

三七八 ふ。三九 食事前て手を洗ひ給はぬを、此のパリサイ人見て怪しみたれば、三九 主これに言ひたまふ「今や汝らパリサイ

四〇 人は、酒杯と盆との外を潔くす、然れど汝らの内は貪慾と惡とにて滿つるなり。四〇 愚なる者よ、外を造りし者

四一 は、内をも造りしならずや。四一 唯その内にある物を施せ。さらば、一切の物なんぢらの爲に潔くなるなり。

四二 禍害なるかな、パリサイ人よ、汝らは薄荷・芸香その他あらゆる野菜の十分の一を納めて、公平と神に對

四三 する愛とを等閑にす、然れど之は行ふべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。四三 禍害なるかな、

四四 パリサイ人よ、汝らは會堂の上座、市場にての敬禮を喜ぶ。四四 禍害なるかな、汝らは露れぬ墓のごとし。其の上を歩む人これを知らぬなり』

四五 教師の一人、答へて言ふ『師よ、斯ることを言ふは、我らをも辱しむるなり』四六 イエス言ひ給ふ『なん

四七 ぢら教師も禍害なる哉、なんぢら擔ひ難き荷を人に負せて、自ら指一つだに其の荷につけぬなり。四七 禍害なる

四八 かな、汝らは預言者たちの墓を建つ、之を殺しし者は汝らの先祖なり。四八 げに汝らは先祖の所作を可しとする證

四九 人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝らは其の墓を建つればなり。四九 この故に神の智慧、いへる言あり、われ預言者

五〇 と使徒とを彼らに遣さん、その中の或者を殺し、また逐ひ苦しめん。五〇 世の創より流されたる凡ての預言者の

五一 血、五一 即ちアベルの血より、祭壇と聖所との間にて殺されたるザカリヤの血に至るまでを、今の代に糺すべきな

五二 り。然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺さるべし。五二 禍害なるかな、教師よ、なんぢらは知識の鍵を取り去り

て自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり』

五三 此處より出で給へば、學者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて様々のことを詰りはじめ、五四 その口より何事

をか捉へんと待構へたり。

一 第二章 一 その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合ふばかりなり。イエスマづ弟子たちに言ひ出で給ふ

二 『なんぢら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり。二 蔽はれたるものに露れぬはなく、

三 隠れたるものに知られぬはなし。三 この故に汝らが暗きにて言ふことは、明きにて聞え、部屋の内にて耳により

イ太二三・六、七 可ハ詩五・九
一・二・三八、三九 路ニ太二二・三五
二〇・四六(路一四 ホ太二三・四 徒一五
・七) 一〇
口太二三・二七 へ太二三・二九
ト來一一・三五
チ(哥前一・二四、三〇 西二・三)
リ四九一五一(太二三
・三四一三六)
又太二五・三四を見よ カ馬二・七八 可七・レ(可三・二 徒二三・
ル創四・八 一三 六・一三三
ヲ代下二四・二〇、二 ヨ太二三・一三 六・六、一一、 ナ可四・二二 路八・
一 夕可一二・二三 路二 一一・可八・二五 一七
ワ太二二・三五を見よ 〇・二〇 ツ路一一・三九 ラ哥前四・五

△太一〇・二七又太二
四・一七を見よ
ウ約一五・一四、一五
井賽五一・七、二二、二
三 太一〇・二八
ノ太五・二二を見よ
オ來一〇・三一太一〇
・二八
ケ太一〇・三三を見よ
徒三・一三、一四約
登三・二三、三・八
テ太一〇・一九可一
三・一一 路二一・一
四・一五
ア太一〇・二〇を見よ
（路二一・一五 徒六
・一〇、二六・一 提
ユ來一三・五
後四・一七）
サ（来六・八 羅二・三、
九・二〇）
キ（提前六・六一一〇）
シ伯二〇・二二、二七
メ詩四九・一六（傳一
・九 羅五・一）
五）
ミ耶一七・二一路二一
・四〇
エ詩三九・六、四九、
一七 耶一七・二一
七 哈二・九（路二・
三三）
・八 詩五二・五―七
雅四・一四
エ詩三九・六、四九、
一七 耶一七・二一
七 哈二・九（路二・
三三）

四 語りしことは、屋の上にて宣べらるべし。四 我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何を爲し得ぬ者どもを
五 懼るな。五 懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲナに投げ入るる權威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、
七六 げに之を懼れよ。六 五羽の雀は二錢にて賣るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。七 汝
八 らの頭の髪までもみな數へらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。ハ われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に
九 我を言ひあらはす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言ひあらはさん。九 されど人の前にて我を否む者は、
一〇 神の使たちの前にて否まれん。一〇 凡そ言をもて人の子に逆ぶ者は赦されん。然れど聖靈を瀆すものは赦されじ。
二 人なんぢらを會堂、或は司、あるひは權威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答へ、または何を言はんと
三 思ひ煩ふな。三 聖靈そのとき言ふべきことを教へ給はん」
二三 群衆のうちの或人いふ「師よ、わが兄弟に命じて、嗣業を我に分たしめ給へ」四 之に言ひたまふ「人よ、
二五 誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ」五 斯て人々に言ひたまふ「慎みて凡ての慳貪をふせげ、人の
二六 生命は所有の豊なるには因らぬなり」六 また譬を語りて言ひ給ふ「ある富める人、その畑豊に實りたれば、一七 心
二八 の中に議りて言ふ「われ如何にせん、我が作物を藏めおく處なし」八 遂に言ふ「われ斯く爲さん、わが倉を毀ち、
二九 更に大なるものを建てて、其處にわが穀物および善き物をことごとく藏めん。九 斯てわが靈魂に言はん、靈魂
三〇 よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば、安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ」三〇 然るに神かれに「愚なる
三二 者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし、然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言ひ給へり。三二 己

のために財を貯へ、神に對して富まぬ者は、斯のごとし』

三三 また弟子たちに言ひ給ふ「この故に、われ汝らに告ぐ、何を食はんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと

二四 體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るなり。鴉を思ひ見よ、播かず、刈らず、納屋も倉

二五 もなし。然るに神は之を養ひたまふ、汝ら鳥に優ること幾許ぞや。汝らの中たれか思ひ煩ひて、身の長一尺

二六 を加へ得んや。然れば最小き事すら能はぬに、何ぞ他のことを思ひ煩ふか。百合を思ひ見よ、紡がず、織ら

二七 ざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンに其の服裝この花の一つにも及かさりき。二八

今日ありて、明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装ひ給へば、況て汝らをや、ああ信仰らすき者よ。

二九 なんぢら何を食ひ、何を飲まんとなむ、また心を動かすな。是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝

三〇 らの父は此等の物の、なんぢらに必要なを知り給へばなり。ただ父の御國を求めよ。さらば此等の物は、な

三一 んぢらに加へらるべし。懼るな小き群よ、なんぢらに御國を賜ふことは、汝らの父の御意なり。汝らの所有

三二 を賣りて施濟をなせ。己がために舊びぬ財布をつくり、盡きぬ財寶を天に貯へよ。かしこは盗人も近づかず、蟲

三三 も壞らぬなり、汝らの財寶のある所には、汝らの心もあるべし。

三四 なんぢら腰に帯し、燈火をともして居れ。主人、婚筵より歸り來りて戸を叩かば、直ちに開くために待

三五 つ人のごとくなれ。主人の來るとき、目を覺しをるを見らるる僕どもは幸福なるかな。われ誠に汝らに告ぐ、

イ(大六・二〇)路一二 二(詩一三九・一四) リ(大六・三〇)を見よ カ(賽四〇・一一)約一 タ(太一一・二五・二六) 一、二 二
三(提前六・一八) ホ(伯三八・四一) 詩一 ヌ(十六・三一) O(二七) (約二二) 弗(一・五、九) 弗(一・五、九) 三(三五、三六) (太二五) ウ(太二四・四二)を見よ
雅(二・五) 四(七・九) (太六・二) ル(太三・二、六・三三) 一(五一・一七) レ(太一九・二二)を見よ 一(一一・一三) 井(太二四・四六)
ロ(二二・三一) 太六、六) ナ(太六・三三)を見よ ヨ(太二五・三四) 約一 ソ(太六・二〇) 路一八 ナ(弗六・一四) 彼前一
二(五・一三三) へ(路一二・一八) 詩三四・一〇) 賽三 八(三六・來二二・二) (二二) 提前六・一九) (一・一三) ラ(太二五・一)
ハ(太六・二五) 路一二 ト(詩三九・五) 三(一・六) 羅八・三三 八(雅二・五) 彼後 (路一二・二二) ヲ(太二五・一)
・(二二) (腓四・六) チ(王上一〇・四一七) ワ(太一四・二七)を見よ 一(一一) 獸一・六 ツ(太六・二二) 西三、 ム(獸三・二〇)

ノ路一七・八 一六・一五 彼後三・二二 四五一五
 才三九、四〇 太二四 ヤ太六・一九 ケ(路一・二、四七、四 一六・二一八) 路 三、四 〇一七
 ・四三、四四 マ(太二五・二三 八) 一六・二一八 半民一五・三〇 約九 メ利五・一七 民一五 二〇・一八、一九 二一、三五
 ク撒前五・二 彼後三 一三・三三 路二一 フ路七・二三を見よ テ(黙三・二二) 四一、一五・二二 二九、九一・一三 七五・一五三、太一〇
 ・一〇 黙三・三三、 三六 撒前五・六 コ四二、四六、太二四 ア傳八・一一 彼後三 徒一七・三〇 雅四 ミ(太一三・二二) 三、四一、三六
 シ(路二・五二) 五可一〇・三八 (太 七米七・六 太一〇・
 二一、三五

主人しゅじん帯おびして其そのの僕しもべどもを食しょくじ事じの席せきに就つかせ、進すすみて給きよ事じすべし。三八 主人しゅじん、夜よの半なかごろ若もしくは夜よの明あくる頃ころに来きたる

とも、斯かくの如ごとくなるを見みらるる僕しもべどもは幸さいはひ福ふなり。三九 なんぢら之これを知しれ、家いへ主あるじもし盗ぬす人びといづれの時とき来きたるかを知しら

ば、その家いへを穿うがたすまじ。四〇 汝なんぢらも備そなへをれ。人ひとの子こは思おもはぬ時ときに來きたればなり』

四二 ペテロ言いふ『主しゅよ、この譬たとへを言いひ給たまふは我われらにか、また凡すべての人ひとにか』四三 主しゅいひ給たまふ『主しゅ人じんが時ときに及およびて

僕しもべどもに定さだめられたる糧かてを與あたへさす爲ために、その僕しもべどもの上うへに立たつる忠まこと實まことにして慧さとき支し配はい人じんは誰たれなるか、四三 主しゅ人じんのきたる

時とき、かく爲なし居をるを見みらるる僕しもべは幸さいはひ福ふなるかな。四四 われ實まことをもて汝なんぢらに告つぐ、主しゅ人じんすべての所もちもの有あるを彼かれに掌つかさどらす

べし。四五 若もししその僕しもべ、心こころのうち主しゅ人じんの來きたるは遅おそしと思おもひ、僕しもべ・婢はしため女めをたたき、飲のみ食くひして醉まひ始はじめなば、

四六 その僕しもべの主しゅ人じんおもはぬ日ひ、知しらぬ時ときに來きたりて、之これを烈むじしく答こたへ、その報むくいを不ふちゆう忠ちゆう者ものと同おなじうせん。四七 主しゅ人じんの意こころを

知しりながら用よう意いせず、又またその意こころに從したがはぬ僕しもべは、答こたへたるること多おほからん。四八 然されど知しらずして、打うたるべき事ことをな

す者ものは、答こたへたること少すくなからん。多おほく與あたへらるる者ものは、多おほく求もとめられん。多おほく人ひとに托たくすれば、更さらに多おほくその人ひとよ

り請こひ求もとむべし。

四九 われは火ひを地ちに投なげんとて來きたれり。此この火ひすでに燃もえたらんには、我われまた何なにをか望のぞまん。五〇 されど我われには受う

くべきバプテスマあり。その成なし遂とげらるるまでは思おもひ逼せまること如何いか許かりぞや。五一 われ地ちに平へい和わを與あたへんために來きた

ると思おもふか。われ汝なんぢらに告つぐ、然しからず、反かへつて分ぶん争さうなり。五二 今いまより後のち、一いつ家かに五ご人にんあらば三さん人にんは二に人にんに、二に人にんは

三さん人にんに分わかれ争あらそはん。五三 父ちちは子こに、子こは父ちちに、母ははは娘むすめに、娘むすめは母ははに、姑しゅうとめ嬢めは嫁よめに、嫁よめは姑しゅうとめ嬢めに分わかれ争あらそはん』

五四 イエスまた群衆に言ひ給ふ「なんぢら雲の西より起るを見れば、直ちに言ふ「急雨きたらん」と、果して
 然り。五五 また南風ふけば、汝等いふ「強き暑あらん」と、果して然り。五六 偽善者よ、汝ら天地の氣色を辨ふるこ
 とを知りて、今の時を辨ふること能はぬは何ぞや。五七 また何故みづから正しき事を定めぬか。五八 なんぢ訴ふる者
 とともに司に往くとき、途にて和解せんことを力めよ、恐くは訴ふる者、なんぢを審判人に引きゆき、審判人な
 んぢを下役にわたし、下役なんぢを獄に投げ入れん。五九 われ汝に告ぐ、一レプタも残りなく償はずば、其處を出
 づること能はじ』

第一三章

一 その折しも或る人々きたりてピラトがガリラヤ人らの血を彼らの犠牲にまじへたりし事をイエス
 に告げられたれば、ニ答へて言ひ給ふ「かのガリラヤ人は斯ることに遭ひたる故に、凡てのガリラヤ人
 に勝れる罪人なりしと思ふか。三 われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、皆おなじく亡ぶべし。四 又シロ
 アムの橋たふれて、押し殺されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人に勝りて罪の負債ある者なりしと思ふ
 か。五 われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、みな斯のごとく亡ぶべし』
 六 又この譬を語りたまふ「或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて果を求むれども得ずして、
 七 園丁に言ふ「視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地
 を塞ぐか」ハ答へて言ふ「主よ、今年も容したまへ、我その周圍を掘りて肥料せん。九 その後、果を結ばば善
 し、もし結ばずば伐り倒したまへ』

イ(太一六・二、三) 二五・二六 チ太二七・二を見よ ヲ(太六・一二、一八) 一六 加五・二二 レ彼後三・九
 ロ(太二〇・一二) 水二五・八 リ徒五・三七 二四 路二・一四 耶一・二一 西一・ソ約一五・二
 ハ太一六・三(路二二) へ詩三三・六 興五五 ヌ(約九・二、三) ワ賽五・一 一〇 太三・二〇、七・一
 ・三〇) 六 ル尼三・一五 賽八・六 カ太二一・一九 タ太三・二〇、七・一
 二五八、五九 太五・ト可一二・四二 約九・七、一一 三太三・八 約一五・九 路三・九
 ナ可五・二三を見よ
 ラ十九・八を見よ
 ム可五・二二を見よ
 ウ(太一二・二) 路一四
 ・三

井出二〇・九中五・一 才路七・二三を見よ
 三 才路七・五、二三・一 才路一九・九 羅四・エ一八、一九 太二三 サ二〇、二二 太二三 ミ太七・一四 (彼前三) 一 一三三・三三三 ス六七・二三、二五・
 ノ太一二・一〇 可三 三一・二九 一、一、二二 三三三・三三三 可四、
 二 路六・七約五 ヤ路一四・五 才路四五・二四 彼前 三〇一三三 太二三・三三三を見よ シ大七・一三(太一六) モ黙二二・一五 (約一〇・二七 提後
 二六 太四・一〇を見よ 三・一六 太一三・二四を見よ ユ太九・三五可六・六 二四 路九・二三) 七太二五・一一 (路六 二・一九)

二〇 イエス安息日に或る會堂にて教へたまふ時、二 視よ、十八年のあひだ、病の靈に憑かれたる女あり、屈ま

三 りて少しも伸ぶること能はず。三 イエスこの女を見、呼び寄せて「女よ、なんぢは病より解かれたり」と言ひ、

四 三之に手を按きたまへば、立刻に身を直ぐにして神を崇めたり。四 會堂司イエスの安息日に病を醫し給ひしこと

五 を憤ほり、答へて群衆に言ふ「働くべき日は六日あり、その間に來りて醫されよ。安息日には爲され」二五 主こたへ

て言ひたまふ『偽善者らよ、汝等おのおの安息日には、己が牛または驢馬を小屋より解きだし、水飼はんとて

六 牽き往かぬか。一六 さらば長き十八年の間サタンに縛られたるアブラハムの娘なる此の女は、安息日にその繋より

七 解かるべきならずや』一七 イエス此等のことを言ひ給へば、逆ふ者はみな恥ぢ、群衆は擧りてその爲し給へる榮光

ある凡ての業を喜び。

一八 斯てイエス言ひたまふ『神の國は何に似たるか、我これを何に擬へん、一九 一粒の芥種のごとし。人これを

二〇 取りて己の園に播きたれば、育ちて樹となり、空の鳥その枝に宿れり』二〇 また言ひたまふ『神の國を何に擬へん

二一 か、二 パン種のごとし。女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、ことごとく脹れいだすなり』

二二 三 イエス教へつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給ふとき、二三 或人いふ『主よ、救はるる者は少き

二四 か』二四 イエス人々に言ひたまふ『力を盡して狭き門より入れ。我なんぢらに告ぐ、入らん事を求めて入り能はぬ

二五 者おほからん。二五 家主おきて門を閉ぢたる後、なんぢら外に立ちて「主よ我らに開き給へ」と言ひつつ門を叩き

二六 始めんに、主人こたへて「われ汝らが何處の者なるかを知らず」と言はん。二六 その時「われらは御前にて飲食

三七 し、なんぢは我らの町の大路にて教へ給へり」と言ひ出でんに、二七 主人こたへて「われ汝らが何處の者なるかを
 二八 知らず、惡をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言はん。二八 汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者
 二九 の、神の國に居り、己らの逐ひ出さるるを見ば、其處にて哀哭・切齒する事あらん。二九 また人々、東より西より
 三〇 南より北より來りて、神の國の宴に就くべし。三〇 視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん」
 三一 そのとき或るパリサイ人ら、イエスに來りて言ふ「いでて此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんとす」三三 答
 へて言ひ給ふ「往きてかの狐に言へ。視よ、われ今日明日、惡鬼を逐ひ出し、病を醫し、而して三日めに全うせ
 三三 られん。三三 されど今日も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレムの外にて死ぬることは有る
 三四 まじきなり。三四 噫エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の己が
 三五 雛を翼のうちに集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。然れど汝らは好まざりき。三五 視
 よ、汝らの家は棄てられて汝らに遺らん。我なんぢらに告ぐ「讚むべきかな、主の名によりて來る者」と、汝ら
 の言ふ時の至るまでは、我を見ざるべし」

第一四章

一 イエス安息日に食事せんとて、或るパリサイ人の頭の家に入り給へば、人々これを窺ふ。二 視よ、
 御前に水腫をわづらふ人ゐたれば、三 イエス答へて教師とパリサイ人とに言ひたまふ「安息日に
 人を醫すことは善しや否や」四 かれら默然たり。イエスその人を執り、醫して去らしめ、五 且かれらに言ひ給ふ
 「なんぢらの中その子あるひは其の牛、井に陥らんに、安息日には直ちに之を引揚げぬ者あるか」六 彼等これに

イ路一三・二五を見よ へ太八・一一 黙七。 三〇 來二・一〇、 四一。 七、五・五、六、但九 一〇 路一九・三八 三七・三一 賽二九 未四三・三五 申二三
 口詩一〇一・四一八 九、一〇 五、九、七、二八 七(申三三・一一) 二七 米三・一一 約一二・一三 二〇、二一 四 路一三・一五
 八太二五・四一 太一九・三〇を見よ 又太二一・一一を見よ 七太二三・三七を見よ 徒二・一〇 夕何三・四、五、羅一一 三太二二・三五を見よ
 二太八・一一 七太二四・一を見よ ル三四、三五、太二三、 加利二六・三二、三三 ヨ詩二一八・二六 太 二五、二六 ツ(太二二・二、一〇
 ホ太八・一二を見よ リ(約一七・四、一九、 三七、三九)路一九 詩六九・二五 賽二、 二二・九 可一一、レ可三・二を見よ 詩 路一三・一四)

ナ太三二・四六を見よ 井詩一八・二七 餓二 五・三三 察五七・一 ヤ約五・二九 徒二四 フ一六―二四(太三二) テ餓九・二、五 察五五 キ申二四・五 路一四
 ラ太三三・六(路一) 九・二三 太三三・一 五 太五・三 雅一 二一(一四) 二・二 二六(好前七・二)
 四三) 二 路一八・一四 九 察二五・六 ア察三〇・一五 約五・ 九、三三)
 ム(餓二五・六、七) 雅四・六 彼前五・五 才申八・一〇、一二 マ太三・二 四〇 二太二一・三四、三二 四〇
 ウ(餓二五・六、七) ノ 伯二二・二九 餓一 太二五・三四―四〇 ケ(餓一九・九) 三 三(路八・一四)

對して物言ふこと能はず。

八七 イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、譬をかたりて言ひ給ふ、ハ「なんぢ婚筵に招かるるとき、上席

九 に着くな。恐らくは汝よりも貴き人の招かれんに、九 汝と彼とを招きたる者きたりて「この人に席を譲れ」と言

〇 はん。さらば其の時なんぢ恥ぢて末席に往きはじめん。〇 招かるるとき、寧ろ往きて末席に著け、さらば招きた

二 くる者きたりて「友よ、上に進め」と言はん。その時なんぢ同席の者の前に響あるべし。二 凡そおのれを高うする

者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」

三 二 また己を招きたる者にも言ひ給ふ「なんぢ晝餐または夕餐を設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人

三 などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんぢを招きて報をなさん。三 饗宴を設くるときは、寧ろ貧しき者・不具・

四 跛者・盲人などを招け。四 彼らは報ゆること能はぬ故に、なんぢ幸福なるべし。正しき者の復活の時に報いらる

るなり」

一五 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言ふ「おほよそ神の國にて食事する者は幸福なり」一六 之に言

一七 ひとたまふ「或人、盛なる夕餐を設けて、多くの人を招く。一七 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣

一八 して「來れ、既に備りたり」と言はしめたるに、一八 皆ひとしく辭りはじむ。初の者いふ「われ田地を買へり、往

一九 きて見ざるを得ず。請ふ、許されんことを」一九 他の者いふ「われ五耦の牛を買へり、之を驗すために往くなり。

二〇 請ふ、許されんことを」二〇 また他の者いふ「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能はず」二一 僕かへりて此等の

事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言ふ「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此處に連れきたれ」三僕いふ「主よ、仰のごとく爲したれど、尙ほ餘の席あり」三主人、僕に言ふ「道や籬の邊にゆき、人々を強ひて連れきたり、我が家に充たしめよ。二四われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味ひ得る者なし」

二五さて大なる群衆イエスに伴ひゆきたれば、顧みて之に言ひたまふ、二六「人もし我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず。二七また己が十字架を負ひて我に従ふ者ならでは、我が弟子と爲るを得ず。二八汝らの中たれか櫓を築かんと思はば、先づ坐して其の費をかぞへ、己が所有、竣工までに足るか否かを計らざらんや。二九然らずして基を据ゑ、もし成就すること能はずば、見る者みな嘲笑ひて、三〇「この人は築きかけて成就すること能はざりき」と言はん。三一又いづれの王か出でて他の王と戦争をせんに、先づ坐して、此の一萬人をもて、かの二萬人を率ゐきたる者に對ひ得るか否か籌らざらんや。三二もし及かずば、敵なほ遠く隔たるうちに使を遣して和睦を請ふべし。三三斯のごとく汝らの中その一切の所有を退くる者ならでは、我が弟子となるを得ず。三四鹽は善きものなり、然れど鹽もし効力を失はば、何によりてか味つけられん、三五土にも肥料にも適せず、外に棄てらるるなり。聽く耳ある者は聽くべし」

取税人・罪人等みな御言を聽かんとて近寄りたれば、ニパリサイ人・學者ら咬きて言ふ、「この人は罪人を迎へて食を共にす」

第一五章

イ母前二・八 太五・三 ホ黙二二・一七 九 太一〇・三七 二四 可八・三四 十 太二〇・一八 ヨ約一五・六 八 路一九・七
 雅二・五 へ 太二・二四、二八 太 子約二二・二五 徒二 路九・二三 (提後) ワ(群三・七、八) 來一 太二一・一五を見よ ツ太九・二一を見よ
 口 太三五・五 二一・四三、二二・〇二、四一、二二・一 三・一二 一・二六 一(路五・二九) (徒一一・三) 加二・
 八 八 一(路一六・二三) 又(太二四・二七) カ太五・二三 可九 一(出二六・二七、八) 一(一三)
 二(詩一三〇・七) ト申一三・六、三三、リ太一〇・三八、一六 ル(來六・一一、一二) 五〇 民一四・二、九、一

六四一七(太一八・二) 二八) 六六・二二) 七) フ(路一六・二二) ア(路七六・七)
 二一四) 結三四・二一、二二、 井詩一九・一七六 三三、一五・一〇) ヤ申二一・一七) コ(王上八・四七)
 九結三四・六(彼前二) 一六(路一九・二〇) 彼前二・二五) ク結一八・二三、三三) マ可二・四四を見よ) エ路一五・二一)
 (二五) ウ(賽四〇・一一、四) ノ太九・一三を見よ) 二一(太一〇・三二) ケ(弗五・一八) 多一) テ(出二〇・一六) 但五
 ラ(出三・一) 母前二七) 九・二二、六〇・四、 路一五・一〇) 路二二・八、一五、 六(彼前四・四) 六・二三)

三 イエス之に譬を語りて言ひ給ふ、四「なんぢらの中たれか百匹の羊を有たんに、若その一匹を失はば、九十
 九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。 五 遂に見出さば、喜びて之を己が肩にかけ、
 六 家に歸りて其の友と隣人と呼び集めて言はん「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」 七 われ汝らに
 告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改の必要なき九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あ
 るべし。

八 又いづれの女が銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失はば、燈火をともし、家を掃きて見出すまでは懇
 ろに尋ねざらんや。 九 遂に見出さば、其の友と隣人と呼び集めて言はん「我とともに喜び、わが失ひたる銀貨
 一〇 を見出せり」 一〇 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のために、神の使たちの前に歡喜あるべし」
 一一 二 また言ひたまふ「或人に二人の息子あり、一二 おとうと父に言ふ「父よ、財産のうち我が受くべき分を我に
 一三 あたへよ」父その身代を二人に分けあたふ。 一三 幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠國にゆき、
 一四 其處にて放蕩にその財産を散せり。 一四 ことごとく費したる後、その國に大なる饑饉おこり、自ら乏しくなり始め
 一五 たれば、一五 往きて其の地の或人に依附りしに、其の人かれを畑に遣して豚を飼はしむ。 一六 かれ豚の食ふ蝗豆にて、
 一七 己が腹を充さんと思ふ程なれど何をも與ふる人なかりき。 一七 此のとき我に反りて言ふ「わが父の許には食物あま
 一八 れる雇人いくばくぞや、然るに我は飢ゑてこの處に死なんとす。 一八 起ちて我が父にゆき「父よ、われは天に對
 一九 し、また汝の前に罪を犯したり。 一九 今より汝の子と稱へらるるに相應しからず、雇人の一人のごとく爲し給へ」

一〇 と言はん」^{二〇}乃ち起ちて其の父のもとに往く。なほ遠く隔りたるに、父これを見て憫み、走りゆき、其の頸を抱
 二 きて接吻せり。^{二一}子、父にいふ「父よ、我は天に對し又なんぢの前に罪を犯したり。今より汝の子と稱へらるる
 三 に相應しからず」^{二三}然れど父、僕どもに言ふ「とくとく最上の衣を持ち來りて之に著せ、その手に指輪をはめ、
 四 其の足に鞋をはかせよ。^{二四}また肥えたる犢を牽ききたりて屠れ、我ら食して樂しまん。^{二五}この我が子、死にて復
 五 生き、失せて復得られたり」斯て、かれら樂しみ始む。^{二六}然るに其の兄、畑にありしが、歸りて家に近づきたる
 六 とき、音樂と舞踏との音を聞き、^{二七}僕の一人を呼びてその何事なるかを問ふ。^{二八}答へて言ふ「なんぢの兄弟、歸
 七 りたり、その恙なきを迎へたれば、汝の父、肥えたる犢を屠れるなり」^{二九}兄、怒りて内に入ること好まざりし
 八 ば、父いでて勸めしに、^{三〇}答へて父に言ふ「視よ、我は幾歳も、なんぢに仕へて、未だ汝の命令に背きし事な
 九 きに、我には小山羊一匹だに與へて友と樂しましめし事なし。^{三一}然るに遊女らと共に、汝の身代を食ひ盡したる
 一〇 此の汝の子、歸り來れば、之がために肥えたる犢を屠れり」^{三二}父いふ「子よ、なんぢは常に我とともに在り、わ
 一一 が物は皆なんぢの物なり。^{三三}然れど此の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの樂しみ喜ぶは
 一 二 當然なり』

第一十六章

一 イエスマた弟子たちに言ひ給ふ「或る富める人に一人の支配人あり、主人の所有を費しをりと訴
 二 へられたれば、^二主人かれを呼びて言ふ「わが汝につきて聞く所は、これ何事ぞ、務の報告をいだ
 三 せ。汝こののち支配人たるを得じ」^三支配人、心のうちに言ふ「如何せん、主人わが職を奪ふ。われ土掘るには

イ 雅四・八
 ロ 創三三・四、四五
 一四、四六・二九
 徒二〇・三七
 八 創四五・一五 母後
 一四・三三 太二六 へ(創四一・四二 帖三
 四九
 二 路一五・一八
 二 路一五・一八
 一〇、八・二二
 九
 ト 結一六・一〇
 又 太八・二二 路九・六
 〇、一五・三二 約
 六六
 リ 路二二・一九、一五
 五・二五 弗二・一、
 ル 路一五・二三
 五 西二・二三 黙
 ナ 路一五・一三
 (路一五・一三)
 タ 路一五・一三
 レ 路一五・一三
 ソ 哥前九・一七 (黙
 二〇・一二)

ツ(路一八・六) ラ太六・二四 路一六 一(一九) 才代上二九・一四、一 九(路一八・二四) 羅八・二七 徒一・ ア太一・二二 路
 ネ路二〇・三四 一(二一) ウ(路一六・四) 六 マ(路一一・三九、二 母前一六・七 代上 二四、一五・八 歌 一五一) 路
 ナ約一二・三六 弗五 ム(太六・二〇、一九 井太二五・二一、二三 ク太六・二四(約登二 〇・四七) 二八・九 詩七・九 二・二三 サ太五・一八 一
 ・八 撒前五・五(羅 二一 路一二・三三 路一九・一七 一(一五) ケ路二三・三五 二二・二 耶二一 エ撒一六・五 キ太五・三二を見よ
 一三・一二) 提前六・一〇、一七 ノ路一六・九 ヤ(提後三・二 提前六 フ路一〇・二九、一八 二〇 一七・一〇 テ太一・一三

力なく、物乞ふは恥かし。四 我なすべき事こそ知りたれ、斯く爲ば職を罷めらるるとき、人々その家に我を迎
 ふるならん」とて、五 主人の負債者を一人一人呼びよせて、初の者に言ふ「なんぢ我が主人より負ふところ何程
 あるか」六 答へて言ふ「油、百樽」支配人いふ「なんぢの證書をとり、早く坐して五十と書け」七 又ほかの者に
 言ふ「負ふところ何程あるか」答へて言ふ「麥、百石」支配人いふ「なんぢの證書をとりて八十と書け」八 爰に
 主人、不義なる支配人の爲しし事の巧なるによりて、彼を譽めたり。この世の子らは己が時代の事には、光の子
 らよりも巧なり。九 われ汝らに告ぐ、不義の富をもて、己がために友をつくれ。然らば富の失する時、その友な
 らんぢらを永遠の住居に迎へん。一〇 小事に忠なる者は、大事にも忠なり。小事に不忠なる者は大事にも不忠なり。
 一一 然らば汝等もし不義の富に忠ならずば、誰か眞の富を汝らに任すべき。一二 また汝等もし人のものに忠ならず
 ば、誰か汝等のものを汝らに與ふべき。一三 僕は二人の主(マ)に兼事ふること能はず、或は之を憎み彼を愛し、或は之
 に親み彼を輕しむべければなり。汝ら神(マ)と富(マ)とに兼事ふること能はず』
 一四 爰に慾深きパリサイ人等この凡ての事を聞きてイエスを嘲笑ふ。一五 イエス彼らに言ひ給ふ「なんぢらは人
 のまへに己を義とする者なり。然れど神は汝らの心を知りたまふ。人のなかに尊ばるる者は、神のまへに憎まる
 る者なり。一六 律法と預言者とは、ヨハネまでなり、その時より神の國は宣傳へられ、人みな烈しく攻めて之に入
 る。一七 されど律法の一畫の落つるよりも天地の過ぎ往くは易し。一八 凡てその妻を出して、他に娶る者は、姦淫を
 行ふなり。また夫より出されたる女を娶る者も姦淫を行ふなり。

一九 或る富める人あり、紫色の衣と細布とを著て、日々奢り樂しめり。二〇 又ラザロといふ貧しき者あり、腫物にて腫れただれ、富める人の門に置かれ、二三 その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ。而して犬ども來りて其の腫物を舐れり。二三 遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携へられてアブラハムの懷裏に入れり。富める人もまた死にて葬られしが、二三 黄泉にて苦惱の中より目を擧げて遙にアブラハムと其の懷裏にをるラザロとを見る。二四 乃ち呼びて言ふ「父アブラハムよ、我を憫みて、ラザロを遣し、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給へ、我はこの焔のなかに悶ゆるなり」二五 アブラハム言ふ「子よ、憶へ、なんぢは生ける間、なんぢの善き物を受け、ラザロは惡しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。二六 然のみならず此處より汝らに渡り往かんとすとも得ず、其處より我らに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵定めおかれたり」二七 富める人また言ふ「さらば父よ、願くは我が父の家にラザロを遣したまへ。二八 我に五人の兄弟あり、この苦痛のところニ來らぬやう、彼らに證せしめ給へ」二九 アブラハム言ふ「彼等にはモーセと預言者とあり、之に聽くべし」三〇 富める人いふ「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改めん」三一 アブラハム言ふ「もしモーセと預言者とに聽かずば、たとひ死人の中より甦へる者ありとも、其の勸を納れざるべし」

一 イエス弟子たちに言ひ給ふ「蹟物は必ず來らざるを得ず、されど之を來らする者は禍害なるかな。二 この小き者の一人を蹟かするよりは、寧ろ礪臼の石を頸に懸けられて、海に投げ入れられん

第十七章

イ帖八・一五 默一八 路一・二二、一五、一〇、三三、四三 三・七
 一六 一〇、三三、四三 ト太二・二三を見よ 又(亞一四・二二)
 口雅五・五を見よ 路二・八 徒五・一 太二・二五、四二を見よ
 八(徒三・二二) 九、八・二六、二二 路三・八、一六・三 (摩六六・二四)
 二(太二五・二七) 七、二三、來一・一 〇、一九、九、約八、一七、二四、(路六・
 太六・二二、太一八 三、一四 三・三三、三九、五三 一七、一四、(路六・
 一〇、二五、三一 へ(約一・一八、一三、 羅四・二二、一六加 二四)
 路二・四〇、八・二 六 來二・六 六
 五、一〇、四二、一 カ路一六・三二、二四 七 徒二・二九を見よ
 八・五、二〇、二二 二七、約五・四五 一 五 約一二・九、一
 一、二八、二三、加 二六・二二、二八、 〇) 太二三・四一、一八
 五・三、弗四・一七 二三 七(哥前二・一九
 提前二・一、四、ヨ路一六・二四を見よ 提前四・一)

ナ太一八・二五(太一
 八・二二) 井可六・三〇を見よ 二〇 可四・三一
 路一三・一九 羅一・三五 二二 三三・三五・七 三二 太八・四 路 哥前一四・二五
 路七・二三を見よ ヤ路一九・四 六 二(利一三・四、五、四 五・一四 太一〇・五を見よ 二四
 ム大六・二四 オ(可九・二四) マ路一二・三七 コ太一九・一(路九・ ア路五・五を見よ 六 六 太九・八を見よ 二九
 ウ(太一八・二二、二 ク太二三・三一、一七 ケ太二五・三〇(伯二 五二 約四・三四) サ利一三・二一、一四、 六・三九 路五・二二 五路一七・一五 約九 せ(路一二・三九)

三 かの善きなり。三 汝等みづから心せよ。もし汝の兄弟、罪を犯さば、これを戒めよ。もし悔改めなば之をゆる
 せ。四 もし一日に七度なんぢに罪を犯し、七度「くい改む」と言ひて、汝に歸らば之をゆるせ』

四五 使徒たち主に言ふ『われらの信仰を増したまへ』 六 主いひ給ふ『もし芥種一粒ほどの信仰あらば、此の桑
 の樹に「抜けて、海に植れ」と言ふとも汝らに従ふべし。七 汝等のうち誰か或は耕し、或は牧する僕を有たん

八 に、その僕、畑より歸りたる時、これに對ひて「直ちに來り食に就け」と言ふ者あらんや。八 反つて「わが夕餐
 の備をなし、我が飲食するあひだ、帶して給仕せよ、然る後に、なんぢ飲食すべし」と言ふにあらんや。九 僕、

一〇 命ぜられし事を爲したればとて、主人これに謝すべきか。一〇 斯のごとく汝らも命ぜられし事をことごとく爲した
 る時「われらは無益なる僕なり、爲すべき事を爲したるのみ」と言へ』

一一 イエス、エルサレムに往かんとして、サマリヤとガリラヤとの間をとほり、一二 或村に入り給ふとき、十人の
 癩病人これに遇ひて、遙に立ち止まり、一三 聲を揚げて言ふ『君イエスよ、我らを憫みたまへ』一四 イエス之を見て

一五 言ひたまふ『なんぢら往きて身を祭司らに見せよ』彼ら往く間に潔められたり。一五 その中の一人、おのが醫され
 たるを見て、大聲に神を崇めつつ歸りきたり、一六 イエスの足下に平伏して謝す。これはサマリヤ人なり。一七 イエ

一八 ス答へて言ひたまふ『十人みな潔められしならずや、九人は何處に在るか。一八 この他國人のほかは、神に榮光を
 歸せんとて歸りきたる者なきか』一九 斯て之に言ひたまふ『起ちて往け、なんぢの信仰なんぢを救へり』

二〇 神の國の何時きたるべきかをパリサイ人に問はれし時、イエス答へて言ひたまふ『神の國は見ゆべき狀に

二 て來らず。三 また「視よ、此處に在り」「彼處に在り」と人々言はざるべし。視よ、神の國は汝らの中に在るなり」

三 三 かくて弟子たちに言ひ給ふ「なんぢら人の子の日の一日を見んと思ふ日きたらん、然れど見ることを得じ。

三三 三 三 そのとき、人々なんぢらに「見よ彼處に、見よ此處に」と言はん、然れど往くな、從ふな。三四 それ電光の天の

三五 彼方より閃きて、天の此方に輝くごとく、人の子もその日には然あるべし。三六 然れど人の子は先づ多くの苦難を

三六 受け、かつ今の代に棄てらるべきなり。三六 ノアの日にありし如く、人の子の日にも然あるべし。三七 ノア方舟に入

三八 る日までは、人々飲み食ひ娶り嫁ぎなど爲たりしが、洪水きたりて彼等をことごとく滅せり。三八 ロトの日にも斯

三九 のごとく、人々飲み食ひ、賣り買ひ、植ゑつけ、家造りなど爲たりしが、三九 ロトのソドムを出でし日に、天より

四〇 火と硫黄と降りて、彼等をことごとく滅せり。四〇 人の子の顯るる日にも、その如くなるべし。三一 その日には人

四一 もし屋の上にをりて、器物、家の内にあらば、之を取らんとて下るな。畑にをる者も同じく歸るな。三三 ロトの妻

四二 を憶へ。三三 おほよそ己が生命を全うせんとする者は、これを失ひ、失ふ者は、これを保つべし。三四 われ汝らに告

四三 ぐ、その夜ふたりの男、一つ寢臺に居らんに、一人は取られ、一人は遺されん。三五 二人の女ともに白ひき居らん

四四 に、一人は取られ、一人は遺されん」^{*}「^{*}弟子たち答へて言ふ「主よ、それは何處ぞ」イエス言ひたまふ

第一八章

「屍體のある處には驚も亦あつまらん」
 「また彼らに落膽せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言ひ給ふ、二「或町に神を畏れず、人を

イ路一七・二三 一九・四三、二一・ト 哥前一・八、五・五 路九・二二、一三、ヲ創一九・一六、二四 四四
 口路一〇・九、一一 六、二三・二九 約 哥後一・二四 聯一 三三 彼後二・七 西三・四 力路五・一九を見よ
 二〇 羅一四・一七 四・二一 六、一〇、二一・二六 三三 創六・五、七・七 撒後一・七 彼前一 可一三・一五、二六 九・三〇
 ハ約八・五六 (廢五) ホ太三四・二三 可一 撒前五・二 撒後二 創六・五、七・七 撒後一 可一三・一五、二六 九・三〇
 一八 三三・二二 路二・八 (二) 撒前五・三 創六・五、七・七 撒後一 可一三・一五、二六 九・三〇
 二大九・一五 可二 (路一七・二二) 太一六・二一、一七 又太二四・三八 約登二・二八 (太 三創一九・二六 撒後三・二三) 九・三〇
 二〇 路五・三五、 へ太三四・二七 二二 可八・三一 路創一九・二二、二四 一六・二七、二四 夕太一〇・三九を見よ 太路二一・三六 羅一 二・二二 弗六・一八
 西一・三 四・二 撒 前五・一七 (路一 五・九) 前八 路二八・四 (哥後八 路二八・四 (路二〇 路二八・四 (路二〇 來一三・九)

ム路一八・二
 ウ路一八・二
 井(路一・八)
 ノ路七・二三を見よ
 オ路八八・一
 ク太二四・二二 可一
 マ路六・一〇(察六三
 三・二〇 羅八・三三
 西三・一二 提後二
 ・二〇 多一・一 彼
 前二・二、二・九
 ヤ(雅五・七 彼後三・
 九)
 コ路三〇・一二 路一
 六・一五(太五・二
 〇 哥後一・九)
 エ路六五・五 羅一四
 ・二〇(約七・四八、
 四九 羅一四・三三)
 テ路三・一(王上一〇・
 五 王下二〇・五、
 八)
 ア太六・五 可一・二
 五(路二二・四二)
 エ路七九・八 但九
 一八
 ヒ路一四・一一を見よ
 モ一五・一七 太一九
 ・二二 可一
 〇・二二 可一
 七路一八・三九
 ス(太一八・三三)
 彼前二・二)
 イ(可九・三九)
 ロ(約三・三、五)
 ハ太一八・三、一九
 一四 可一〇・一五
 (路八・二三 哥前
 四・二〇 雅一・二二
 彼前二・二)

顧みぬ裁判人あり。三 その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を密きたまへ」と言ふ。四 かれ久

しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言ふ「われ神を畏れず、人を顧みねど、五 此の寡婦われを煩はせば、

我かれが爲に審かん、然らずば絶えず來りて我を惱さん」と六 主いひ給ふ「不義なる裁判人の言ふことを聽

け、七 まして神は夜晝よばはる選民のために、縦ひ遅くとも遂に審き給はざらんや。八 我なんぢらに告ぐ、速か

に審き給はん。然れど人の子の來るとき地上に信仰を見んや』

九 また己を義と信じ、他人を輕しむる者どもに此の譬を言ひたまふ、一〇 二人のもの祈らんとて宮にのぼる、

一人はパリサイ人、ひとりは取税人なり。二 パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、

強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。三 我は一週のうち二度斷食し、

凡て得るものの十分の一を獻ぐ」三 然るに取税人は遙に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ

「神よ、罪人なる我を憫みたまへ」四 われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り

往けり。おほよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

一五 イエスの觸り給はんことを望みて、人々嬰兒らを連れ來りしに、弟子たち之を見て禁めたれば、一六 イエス

幼兒らと呼びよせて言ひたまふ「幼兒らの我に來るを許して止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。一七 われ誠

に汝らに告ぐ、おほよそ幼兒のごとくに、神の國をうくる者ならずば、之に入るに能はず』

一八或司、問ひて言ふ「善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか」一九イエス言ひ給ふ「なにゆゑ我

二〇を善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし。二〇誠命は、なんぢが知る所なり「姦淫するなかれ」「殺すなかれ」

二一「盗むなかれ」「偽證を立つる勿れ」「なんぢの父と母とを敬へ」二二彼いふ「われ幼き時より皆これを守れり」

二三三イエス之をききて言ひたまふ「なんぢなほ足らぬこと一つあり、汝の有てる物を、ことごとく賣りて貧しき者

二四に分ち與へよ、然らば財寶を天に得ん。かつ來りて我に従へ」二三彼は之をききて甚く悲しめり、大に富める者な

二五ればなり。二四イエス之を見て言ひたまふ「富める者の神の國に入るは如何に難いかな。二五富める者の神の國に入

二六るよりは、駱駝の針の穴をとほるは反つて易し」二六之をきく人々いふ「さらば誰か救はるる事を得ん」二七イエス

二八言ひたまふ「人のなし得ぬところは、神のなし得る所なり」二八ペテロ言ふ「視よ我等わが物をすてて汝に従へ

二九り」二九イエス言ひ給ふ「われ誠に汝らに告ぐ、神の國のために、或は家、或は妻、或は兄弟、あるひは兩親、あ

三〇るひは子を棄つる者は、誰にても、三〇今の時に數倍を受け、また後の世にて、永遠の生命を受けぬはなし」

三一三イエス十二弟子を近づけて言ひたまふ「視よ、我らエルサレムに上る。人の子につき預言者たちによりて

三二録されたる凡ての事は、成遂げらるべし。三三人の子は異邦人に付され、嘲弄せられ、辱しめられ、唾せられん。

三三彼等これを鞭ち、かつ殺さん。斯て彼は三日めに甦へるべし」三四弟子たち此等のことを一つだに悟らず、此の

三四言かれらに隠れたれば、その言ひ給ひしことを知らざりき。

イ一八一—三〇太一九 ・二六一—二九可一 〇・二七一—三〇(路 一〇・二五—二八)	申五・二六一—二〇 羅一・三・九(太五・ 二一、二七、三三)	チ太一九・二三を見よ (太一三・二二)	ヨ三一—三三三太二〇 ・二七一—一九可一 〇・三三—三四	ナ太一六・二一を見よ ラ可九・三三を見よ (路二四・一六)
口太二五・三四を見よ (太一九・一六)	二(雅三・六) ホ太一九・二一を見よ へ太六・二〇	リ太一九・二四可一 〇・二五 又太一九・二六を見よ ル太四・二〇(二二)可 一・一八、二〇路五	六・三三三路四・ 二六 夕路九・五一を見よ レ路二二・一一三一 察五二・一三一—五三	ツ太二七・二六—三一 ネ可一〇・三四を見よ
ハ出二〇・二—一六 ト(結三三・三一)	ト(結三三・三一)	カ太一二・三三を見よ	二二太一・二二	

ム三五―四三、太二
 〇・二九―三四 可 井約九・二、八
 一〇・四六―五二 可 ノ太二・二三を見よ
 ウ(太二〇・二九可) 才大九・二七を見よ
 〇・四六 路一九・ク路一八・一五
 ヤ可一〇・三六
 マ太九・二二を見よ
 ケ太・八を見よ
 フ路一九・三七(路九
 ・四三、一三・一七)
 コ路一八・三五を見よ
 エ王上一〇・二七 代
 上二七・二八 代下
 ア(路一〇・三八)
 一・一五、九・二七
 サ路一五・二を見よ
 詩七八・四七 察九
 キ(路一八・二二)
 ミ路一六・二四を見よ
 ・一〇 路一七・六
 テ(路一三・三三)
 ヌ母後一二・六 (田
 二二・一 利六・五
 民五・七)
 シ結三四・一一、二二、
 一六 大九・一三、
 一五・二四 路一五
 ・四

三五 イエス、エリコに近づき給ふとき、一人の盲人、路の傍らに坐して、物乞ひ居たりしが、群衆の過ぐるを聞きて、その何事なるかを問ふ。三七 人々ナザレのイエスの過ぎたまふ由を告げられたれば、三八 盲人、呼はりて言ふ「ダビデの子イエスよ、我を憫みたまへ」三九 先だち往く者ども、彼を禁めて黙さしめんと爲たれど、増々さけびて言ふ「ダビデの子よ、我を憫みたまへ」四〇 イエス立ち止り盲人を連れ来るべきことを命じ給ふ。かれ近づきたれば、四一 イエス問ひ給ふ「わが汝に何を爲さんことを望むか」彼いふ「主よ、見えんこととなり」四二 イエス彼に「見ることを得よ、なんぢの信仰なんぢを救へり」と言ひ給へば、四三 立刻に見ることを得、神を崇めてイエスに従ふ。民みな之を見て神を讚美せり。

第十九章

一 エリコに入りて過ぎゆき給ふとき、二 視よ、名をザアカイといふ人あり、取税人の長にて富める者なり。三 イエスの如何なる人なるかを見んと思へど、丈矮うして群衆のために見ること能はず、四 前に走りゆき、桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給ふ故なり。五 イエス此處に至りしとき、仰ぎ見て言ひたまふ「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に入りて宿るべし」六 ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎ふ。七 人々みな之を見て咥きて言ふ「かれは罪人の家に入りて客となれり」八 ザアカイ立ちて主に言ふ「主、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、若し、われ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん」九 イエス言ひ給ふ「けふ救はこの家に来れり、此の人もアブラハムの子なればなり。一〇 それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり」

二人々これらの事を聴きぬるとき、譬を加へて言ひ給ふ。これはイエス、エルサレムに近づき給ひ、神の
 國たちどころに現るべしと彼らが思ふ故なり。三乃ち言ひたまふ「或る貴人、王の權を受けて歸らんとて遠き國
 へ往くとき、三十人の僕をよび、之に金十ミナを付して言ふ「わが歸るまで商賣せよ」四然るに其の地の民かれ
 を憎み、後より使を遣して「我らは此の人の我らの王となることを欲せず」と言はしむ。五貴人、王の權をうけ
 て歸り來りしとき、銀を付し置きたる僕どもの、如何に商賣せしかを知らんとて彼らと呼ばしむ。六初のもの進
 み出でて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは十ミナを贏けたり」七王いふ「善いかな、良き僕、なんぢは小事に忠な
 りしゆゑ、十の町を司どるべし」八次の者きたりて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは五ミナを贏けたり」九王また
 言ふ「なんぢも五つの町を司どるべし」一〇また一人きたりて言ふ「主よ、視よ、なんぢの一ミナは此處に在り。
 我これを袱紗に包みて藏め置きたり。二これ汝の嚴しき人なるを懼れたるに因る。なんぢは置かぬものを取り、
 播かぬものを刈るなり」三王いふ「惡しき僕、われ汝の口によりて汝を審かん。我の嚴しき人にて、置かぬもの
 を取り、播かぬものを刈るを知るか。三何ぞわが金を銀行に預けざりし、然らば我きたりて元金と利子とを請求
 せしものを」四斯て傍らに立つ者どもに言ふ「かれの一ミナを取りて十ミナを有てる人に付せ」五彼等いふ「主
 よ、かれは既に十ミナを有てり」三六「われ汝らに告ぐ、凡て有てる人はなほ與へられ、有たぬ人は有てるものをも
 取らるべし。三七而して我が王たる事を欲せぬ、かの仇どもを、此處に連れきたり我が前にて殺せ」
 三八 イエス此等のことを言ひてのち、先だち進みてエルサレムに上り給ふ。

イ路九・五一を見よ 二(太二五・二) 又(母前二五・三) カ太一三・一二を見よ ソ路九・五一を見よ
 口(路一七・二〇)徒一 一(約二一・二二) 路一六・一〇 哥前 ル(哥後八・一二) ヨ路一九・一四 二一〇(約二二・二)
 六(一) 三(三) 四(二) (提前三・一) テ太一八・三三 夕(母前一五・三三)太 二二(二・七) 二一九(可二・二)
 八一(二一・二七) (太二 へ(約一・一四) 三(三) 四(二) (提前三・一) 夕(母前一五・三三)太 二二(二・七) 二一九(可二・二)
 五・一四一(三〇) ト路一九・二七 リ(太二四・四七) 二〇、一五・六 レ可一〇・三二 ツ二九一三八 太二一
 二一九(可二・二) ナ太二一・一七を見よ
 一〇(約二二・二) ラ(可一四・一三)
 二一(五(路九・九) ム(路二三・五三)
 太二一・一を見よ ウ路一九・三四
 路一九・三七 非路二二・一三

ノ路一九・三一
オ(王下九・二三)
ク路一九・二九
ヤ(太二一・二五約一
二・二七、一八)

マ路一八・四三
ケ詩一八・二六
一三・三五
フ太二・二を見よ
コ路二・一四(詩一四
ア四一・四四(路一
キ(申三二・二九)

八・一 太二・一九)
エ(太二一・一五、一
六)
テ(哈二・一一)
ア四一・四四(路一
キ(申三二・二九)

三・三四、三五、二
三・二八―三二)
サ(約一・三五來五
七)
三三 耶六・六 結
四・二、二六・八
ヒ太二四・二 可一三
二一 路二一・六
シ路二一・二〇
エ詩一三七・九
一三・一六 何一三、
二四)
セ四五、四六 太二一
・二二、二三 可一
二五 一七(約二
・二三―一六)
ス解五六・七
イ耶七・一一 太二一
・二三 可一、一七

二九 オリブといふ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに近づきし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給

ふ、三〇「向ひの村にゆけ。其處に入らば一度も人の乗りたる事なき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き

きたれ。三一 誰かもし汝らに「なにゆゑ解くか」と問はば、斯く言ふべし「主の用なり」と」三三 遣されたる者ゆき

たれば、果して言ひ給ひし如くなるを見る。三三 かれら驢馬の子をとく時、その持主ども言ふ「なにゆゑ驢馬の子

を解くか」三四 答へて言ふ「主の用なり」三五 かくて驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上につけ

て、イエスを乗せたり。三六 その往き給ふとき、人々おのが衣を途に敷く。三七 オリブ山の下りあたりまで近づき來

り給へば、群れある弟子等みな喜びて、その見しところの能力ある御業につき、聲高らかに神を讚美して言ひ始

む、三八「讚むべきかな、主の名によりて來る王。天には平和、至高き處には榮光あれ」三九 群衆のうちの或るパリサ

イ人ら、イエスに言ふ「師よ、なんぢの弟子たちを禁めよ」四〇 答へて言ひ給ふ「われ汝らに告ぐ、此のともがら

黙さば、石叫ぶべし」

四二 既に近づきたるとき、都を見やり、之がために泣きて言ひ給ふ、四三「ああ汝、なんぢも若しこの日の間に

平和にかかはる事を知りたらんには――然れど今なんぢの目に隠れたり。四四 日きたりて敵なんぢの周圍に壘を

きづき、汝を取り圍みて四方より攻め、四五 汝と、その内にある子らとを地に打ち倒し、一つの石をも石の上に遣

さざるべし。なんぢ眷顧の時を知らざりしに因る」四五 斯て宮に入り、商ひする者どもを逐ひ出しはじめ、四六 之に

言ひたまふ「わが家は祈の家たるべし」と録されたるに、汝らは之を強盜の巢となせり」

四七一 イエス日々宮にて教へたまふ。祭司長・學者ら及び民の重立ちたる者ども之を殺さんと思ひたれど、四八 民

みな耳を傾けて、イエスに聽きたれば爲すべき方を知らざりき。

第二〇章

一 或日イエス宮にて民を教へ、福音を宣へ給ふとき、祭司長・學者らは、長老どもと共に近づき

我らに告げよ』三 答へて言ひ給ふ『われも一言なんぢらに問はん、答へよ。四 ヨハネのバプテスマは、天よりか

人よりか』五 彼ら互に論じて言ふ『もし「天より」と言はば「なに故かれを信ぜざりし」と言はん。六 もし「人

より」と言はんか、民みなヨハネを預言者と信するによりて我らを石にて撃たん』七 遂に何處よりか知らぬ由を

答ふ。八 イエス言ひたまふ『われも何の權威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ』

九 斯て次の譬を民に語りいで給ふ『ある人、葡萄園を造りて農夫どもに貸し、遠く旅立して久しくなりぬ。

一〇 時至りて、葡萄園の所得を納めしめんとて、一人の僕を農夫の許に遣ししに農夫ども之を打ちたたき、空手に

て歸らしめたり。二 又ほかの僕を遣ししに、之をも打ちたたき辱しめ、空手にて歸らしめたり。三 なほ三度めの

者を遣ししに、之をも傷つけて逐ひ出したり。四 葡萄園の主いふ『われ何を爲さんか。我が愛しむ子を遣さん、

或は之を敬ふなるべし』五 農夫ども之を見て互に論じて言ふ『これは世嗣なり。いざ殺して其の嗣業を我らの

物とせん』六 斯てこれを葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。さらば葡萄園の主、かれらに何を爲さんか、一六 來りて

イ 太二六・五五を見よ へ(徒四・一六・二二) 又太一一・九を見よ 太二一・二八

ロ(太二一・四六) ト(出二・一四 約一・ 約七・二九・三〇) 太二一・二八

ハ一一八 太二一・二二 二五 徒四・七 約五・三五) カ太二五・一四・一五

三二二七 可一一・ テ路一五・一八・二一 ル九一九 太二二・ (可一三・三四) ヨ歌八・一一・二二

二七三三三 約三・二七 三三一四六 可一二 タ一〇一一二 太五・ 哥後一・二四一一

二太二六・五五を見よ リ太二二・三二 路七 タ詩八〇・八 羅五・一 二二、二三・六、二

ホ路八・二 三・三四、三七(代下 來一一・三六、三七) ラ(王上二一・一九) ム來一三・一二

二四・一九、三六、 一五、一六 厄九・二) ソ徒五・四一 六 耶三七・一五、 ツ太三・一七を見よ

三八・六 徒七・五二 ネ(路一八・二二) ナ來一・二二 (羅八・一 七) ウ太二二・四一 可一 二・九 (太二四・五 〇、五一 路一九、 二七)

三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七

七人これを妻としたればなり』^{三四} イエス言ひ給ふ『この世の子らは娶り嫁ぎすれど、^{三五} かの世に入るに、死人の中より甦へるに、相應しと爲らるる者は、娶り嫁ぎすることなし。^{三六} 彼等ははや死ぬること能はざればなり。御使たちに等しく、また復活の子どもにして、神の子供たるなり。^{三七} 死にたる者の甦へる事は、モーセも柴の條に、主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼びて之を示せり。^{三八} 神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり。それ神の前には皆生けるなり』^{三九} 學者のうちの或者ども答へて『師よ、善く言ひ給へり』と言ふ。^{四〇} 彼等ははや、何事をも問ひ得ざりし故なり。

四一 イエス彼らに言ひたまふ『如何なれば人々、キリストをダビデの子と言ふか。^{四二} ダビデ自ら詩篇に言ふ、『主わが主に言ひ給ふ、^{四三} われ汝の敵を汝の足臺となすまでは、わが右に坐せよ』^{四四} ダビデ斯く彼を主と稱ふれば、争でその子ならんや』

四五 民の皆ききをる中にて、イエス弟子たちに言ひ給ふ、^{四六} 學者らに心せよ。彼らは長き衣を著て歩むことを好み、市場にての敬禮、會堂の上座、饗宴の上席を喜び、^{四七} また寡婦らの家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。其の受くる審判は更に厳しからん』

第二章

一 イエス目を舉げて、富める人々の納物を、賽銭函に投げ入るるを見、^二 また或る貧しき寡婦のレプタ二つを投げ入るるを見て言ひ給ふ、^三 われ實をもて汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、凡ての

イ太二・三二を見よ
口太二・三八 路一
七・二七 (路二〇・三五)
ハ二・三二を見よ
(路一八・三〇)
ニ太二・八を見よ
徒五・四一 撒後一
約三・二二
チ出三・一四・一七
可一・二二・二六
ホ 哥前一・五・四、五
五 歌二・四
ヘ (來二・七、八)
ト 創一・二六 詩八二
六 羅八・一四
七、一九、二二、二三
ル 羅六・一一、一四
七、八 哥後五・一五
加二・一九 撒前五
一〇 (來九・一四)
ヨ 太九・二七を見よ
夕 詩一〇〇・一 徒二
三、四、三五 來一
一三 (哥前二五・二
五 來一〇・一三)
レ (徒七・四九)
ソ (羅一・三、四)
ツ 四一・四七 太二三
ム (太六・五、七)
ウ 雅三・一
井 一・四 可一三
四 一・四四
ノ 王下二・九 約八
二〇 (太二七・六)
七、八 哥後五・一五
加二・一九 撒前五
一〇 (來九・一四)
ヨ 太九・二七を見よ
夕 詩一〇〇・一 徒二
三、四、三五 來一
一三 (哥前二五・二
五 來一〇・一三)
レ (徒七・四九)
ソ (羅一・三、四)
ツ 四一・四七 太二三
ム (太六・五、七)
ウ 雅三・一
井 一・四 可一三
四 一・四四
ノ 王下二・九 約八
二〇 (太二七・六)
七、八 哥後五・一五
加二・一九 撒前五
一〇 (來九・一四)
ヨ 太九・二七を見よ
夕 詩一〇〇・一 徒二
三、四、三五 來一
一三 (哥前二五・二
五 來一〇・一三)
レ (徒七・四九)
ソ (羅一・三、四)
ツ 四一・四七 太二三
ム (太六・五、七)
ウ 雅三・一
井 一・四 可一三
四 一・四四
ノ 王下二・九 約八
二〇 (太二七・六)

ク可一・二・四を見よ、
 ヤ五・一三六、大二四、
 一・一五二、可一三三、
 一・一三七、
 マ路一七・二二を見よ
 路一九・四三、四四
 ケ(徒一・六、七)

フ耶二九・八、弗五・六
 可一・一五
 西二・八、撒後二・三
 約三三・七
 コ耶一四・一四、約登
 二・一八
 エ約八・二四
 テ(太三・二、四・一七、
 メ(賽一九・一七)

可一・一五
 ア路一七・二三
 サ(路二四・三七)
 キ路六・二二
 ユ徒一・二八、路六
 八
 シ一・二一、七、太一〇
 一・二七、二二、可一

三(徒四・三、五、
 一八)
 一(徒二・一六、
 二・二五、路二二
 一・三三、一三三、
 三、一五、一
 一六・二三、二四、
 二二・一九、二四、
 二七、哥後一・二、
 ス(腓一・二二、一九)

三(徒四・三、五、
 一八)
 一(徒二・一六、
 二・二五、路二二
 一・三三、一三三、
 三、一五、一
 一六・二三、二四、
 二二・一九、二四、
 二七、哥後一・二、
 ス(腓一・二二、一九)

へ約一五・一八、二一
 (路六・二二)
 ト太一〇・三〇を見よ
 太一〇・二二、二四
 二三、羅二・七(來
 一〇・三六、雅一・三、
 五・八、彼後一・六)

四 人よりも多く投げ入れたたり。彼らは皆その豊なる内より納物の中に投げ入れ、この寡婦はその乏しき中より、

己が有てる生命の料をことごとく投げ入れたればなり』

五 或る人々、美麗なる石と獻物にて宮の飾られたる事を語りしに、イエス言ひ給ふ、六「なんぢらが見る此

等の物は、一つの石も崩されずして石の上に残りぬ日きたらん』七 彼ら問ひて言ふ「師よ、さらば此等のことは

何時あるか、又これらの事の成らんとする時は如何なる兆あるか』八 イエス言ひ給ふ「なんぢら惑されぬやうに

心せよ、多くの者わが名を冒し來り「われは夫なり」と言ひ「時は近づけり」と言はん、彼らに従ふな。九 戦争

と騒亂との事を聞くと、怖づな。斯ることは先づあるべきなり。然れど終は直ちに來らず』

一〇 また言ひたまふ「民は民に、國は國に逆ひて起たん」一 かつ大なる地震あり、處々に疫病・饑饉あらん。

二 懼るべき事と天よりの大なる兆とあらん。三 すべて此等のことに先だちて、人々なんぢらに手をくだし、汝らを

責めん、即ち汝らを會堂および獄に付し、わが名のために王たち司たちの前に曳きゆかん。四 これは汝らに證の

機とならん。五 然れば汝ら如何に答へんと預じめ思慮るまじき事を心に定めよ。六 われ汝らに凡て逆ふ者の、言

ひ逆ひ、言ひ消すことをなし得ざる口と智慧とを與ふべければなり。七 汝らは兩親・兄弟・親族・朋友にさへ付

されん。又かれらは汝らの中の或者を殺さん。八 汝等わが名の故に凡ての人に憎まるべし。九 然れど汝らの頭の

髪一すぢだに失せじ。一〇 汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし。

二〇

二〇 汝らエルサレムが軍勢に圍まるるを見れば、その亡近づけりと知れ。二三その時ユダヤに居る者どもは山に遁

二一

れよ、都の中にをる者どもは出でよ、田舎にをる者どもは都に入るな、三三これ録されたる凡ての事の遂げらるべ

二二

き刑罰の日なり。三三その日には孕りたる者と、乳を哺する者とは禍害なるかな。地に大なる艱難ありて、御怒こ

二三

の民に臨み、二四彼らは劍の刃に斃れ、又は捕はれて諸國に曳かれん。而してエルサレムは異邦人の時満つるまで

二四

異邦人に蹂躪らるべし。二五また日・月・星に兆あらん。地にては國々の民なやみ、海と濤との鳴り轟くによりて

二五

狼狽へ、二六人々おそれ、かつ世界に來らんとする事を思ひて膽を失はん。これ天の萬象、震ひ動けばなり。二七其

二六

のとき人々、人の子の能力と大なる榮光とをもて、雲に乗りきたるを見ん。二八これらの事起り始めなば、仰ぎて

二七

首を擧げよ。汝らの贖罪、近づけるなり』

二八

二九 また譬を言ひたまふ『無花果の樹、また凡ての樹を見よ、三〇既に芽せば、汝等これを見てみづから夏の近

二九

きを知る。三三斯のごとく此等のことの起るを見れば、神の國の近きを知れ。三三われ誠に汝らに告ぐ、これらの事

三〇

ことごとく成るまで、今の代は過ぎゆくことなし。三三天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎゆくことなし。

三一

三四 汝等みづから心せよ、恐らくは飲食にふけり、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけぬ時、かの日霜の

三二

ごとく來らん。三五これは徧く地の面に住める凡ての人に臨むべきなり。三六この起るべき凡ての事をのがれ、人の

三三

子のまへに立ち得るやう、常に祈りつつ目を覺しをれ』

三四

三七 イエスは晝は宮にて教へ、夜は出でてオリブといふ山に宿りたまふ。三八 民はみな御教を聽かんとて、朝とく

三五

イ路一九・四三 二四・二七 默二 一七・一三

三六

口(路一七・三三) 二五 一七・一三 默二 一七・一三

三六

ハ太一・二二を見よ 路二二・三三・二九 一七・一三 默二 一七・一三

三七

ニ路三四・八、六三、ヘ(但八・一九) 又路六三・三、一八但 耳二・一〇、三一、八・一二

三八

四 何九・七(但九 ト(路三四・二六 出 八・一三 路二二・三三 三・一五 路五・二 一五 徒二・二〇 一五 徒二・二〇 一五 徒二・二〇

可一三・三三三、一四
 三四、三八 (徒二
 〇・三一 哥前一六
 一三 黙一六・一
 五)
 一・一九 路二二・
 三九 (約八・一)
 一〇・三一 哥前一六
 井太二二・二八 (約八
 二) (可一・二〇)
 一〇、一一
 太四・一〇を見よ
 約一三・二、二七
 路二二・五二 徒四
 一、五、二四、二六
 (代上九・一一 尼一
 一・二二)
 一〇、一一
 太四・一〇を見よ
 約一三・二、二七
 路二二・五二 徒四
 一、五、二四、二六
 (代上九・一一 尼一
 一・二二)
 フ (路二二・四八)
 コ七一・三 太六
 一七一・九 可一四
 二二・一六
 エ可一四・二二を見よ
 徒三・二、三、四、一
 一、四・一三、二九、
 九・九)
 八・二四
 ア太二六・二〇 可一
 四・一七
 サ可六・三〇を見よ
 路一四・一五、二二
 二八、三〇 (黙一
 二八)
 ユ二七一・二〇 太二六
 二六・二九 可
 一四・二二・二五
 (哥前一〇・一六一
 二一、一一・二三一
 二八)
 ム太二四・一九を見よ
 路二二・二九

宮にゆき、御許に集れり。

第二章

一 さて過越といふ除酵祭、近づけり。二 祭司長・學者らイエスを殺さんとし、その手段いかにと求む、民を懼れたればなり。

三 時にサタン、十二の一人なるイスカリオテと稱ふるユダに入る。四 ユダ乃ち祭司長・宮守頭どもに往きて、

イエスを如何して付さんと議りたれば、五 彼ら喜びて銀を與へんと約す。六 ユダ諾ひて群衆の居らぬ時に

イエスを付さんと好き機をうかがふ。

七 過越の羔羊を屠るべき除酵祭の日、來りたれば、八 イエス、ペテロとヨハネとを遣さんとして言ひたまふ

「往きて我らの食せん爲に過越の備をなせ」九 彼ら言ふ「何處に備ふることを望み給ふか」一〇 イエス言ひたまふ

「視よ、都に入らば、水をいれたる瓶を持つ人なんぢらに遇ふべし、之に従ひゆき、その入る所の家にいりて、

一家の主人に「師なんぢに言ふ、われ弟子らと共に過越の食をなすべき座敷は何處なるか」と言へ。二三 さらば

調へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に備へよ」二三 かれら出で往きて、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て

過越の設備をなせり。二四 時いたりてイエス席に著きたまひ、使徒たちも共に著く。二五 斯て彼らに言ひ給ふ「われ

苦難の前に、なんぢらと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり。二六 われ汝らに告ぐ、神の國にて過越の

成就するまでは我復これを食せざるべし」二七 かくて酒杯を受け、かつ謝して言ひ給ふ「これを取りて互に分ち飲

一九八 め。一ハわれ汝らに告ぐ、神の國の來るまでは、われ今よりのち葡萄の果より成るものを飲まじ』一九またパンを取

二〇 り謝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ『これは汝らの爲に與ふる我が體なり。我が記念として之を行へ』

二一 夕餐ののち酒杯をも然して言ひ給ふ『この酒杯は汝らの爲に流す我が血によりて立つる新しき契約なり。二二然

二三 れど視よ、我を賣る者の手、われと共に食卓の上であり、三三實に人の子は、定められたる如く逝くなり。然れど

二四 之をうる者は禍害なるかな』二三弟子たち己らの中にて此の事をなす者は、誰ならんと互に問ひ始む。

二五 二四また彼らの間に己らの中たれか大ならんとの争論おこりたれば、二五イエス言ひたまふ『異邦人の王は、そ

二六 の民を宰どり、また民を支配する者は、恩人と稱へらる。二六然れど汝らは然あらざれ、汝等のうち大なる者は若

二七 き者のごとく、頭たる者は事ふる者の如くなれ。二七食事の席に著く者と事ふる者とは、何れか大なる。食事の席

二八 に著く者ならずや、然れど我は汝らの中にて事ふる者のごとし。二八汝らは我が嘗試のうち絶えず我とともに居

二九 りし者なれば、二九わが父の我に任じ給へるごとく、我も亦なんぢらに國を任す。三〇これ汝らの我が國にて我が食

三〇 卓に飲食し、かつ座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん爲なり。三〇シモン、シモン、視よ、サタン汝らを

三一 麥のごとく篩はんとて請ひ得たり。三三然れど我なんぢの爲にその信仰の失せぬやうに祈りたり、なんぢ立ち歸り

三二 てのち兄弟たちを堅うせよ』三三シモン言ふ『主よ、我は汝とともに獄にまでも、死にまでも往かんと覺悟せり』

三四 イエス言ひ給ふ『ペテロよ我なんぢに告ぐ、今日なんぢ三度われを知らずと否むまでは雞鳴かざるべし』

イ太二六・二九 可一 後三・六 來八・八、 一三・一八—二六 四六 ヨ(太二〇・二八) 三三 一

四・二五 一三・九・一五(出) 卜路三三・四、二二 二五—二八 可一 五 奈徒二六・七 雅一・一

口路二二・二七 二四・八 耶三一・ 二五—二八 可一 五 奈徒四・一〇を見よ 井三三・三四 太二六

ハ約六・五一 三一—三四 八、一〇・四二、一 〇・四二—四五 一 二—二六 二—二六 可一

二太二六・二八 可一 へ二二—二三 太二六 七・三一 一 二—二六 二—二六 可一

四・二四 二二—二四 可一 二二—二四 可一 四・二四 可一 路二二・四、二二 四・二九—三一 約

ホ哥前一一・二五 哥 四・一八—二一(約) 又可九・三四 路九・ 一 二—二六 二—二六 可一

才太一〇・九、一〇可 五二 徒二二・二 ケ路二二・三六を見よ 三六一四六 可一 (太二六・三九 可 一四
 六・八九 路九・三、 來一・三七 默二 フ(太二六・三〇) 可 四・三二一四二 一四・三五 路一八・ シ(來五・七)
 一〇・四 二六・六・八、一三 一四・二六 約一八 ア路二二・四六 彼前 一、一、一三) 五(來一・二・四)
 太二六・四七、五一、 二〇、一九・二二) コ(路二二・三七) 四・七(太六・二三) キ太二〇・二二を見よ ヒ路二二・四〇
 五二、五五 可一四 ヤ餐五三・二二) エ太二二・二を見よ 〇、二〇・三六、二 ヌ太二六・三九を見よ モ四七・五三 太二六
 路二二・三八、四九、 三〇) テ四〇一四六 太二六 一・五 弗三・一四 ミ太四・二一 來一、 四・四三―五〇 約
 一八・三一―一 一四 一四・三五 路一八・ 一、一、一三) 五(來一・二・四) ス(路二二・四)
 一八・三一―一 一四 一四・三五 路一八・ 一、一、一三) 五(來一・二・四) ス(路二二・四)
 一八・三一―一 一四 一四・三五 路一八・ 一、一、一三) 五(來一・二・四) ス(路二二・四)
 一八・三一―一 一四 一四・三五 路一八・ 一、一、一三) 五(來一・二・四) ス(路二二・四)

三五 斯て弟子たちに言ひ給ふ『財布・囊・鞋をも持たせずして、汝らを遣ししとき、缺けたる所ありしや』彼
 三六 と言ふ『無かりき』三六 イエス言ひ給ふ『されど今は財布ある者は之を取れ、囊ある者も然すべし。また劍なき者
 三七 は衣を賣りて劍を買へ。三七 われ汝らに告ぐ「かれは愆人と共に數へられたり」と録されたるは、我が身に成遂げ
 三八 らるべし。凡そ我に係はる事は成遂げらるればなり』三八 弟子たち言ふ『主、見たまへ、茲に劍二振あり』イエス
 言ひたまふ『足れり』

三九 遂に出でて常のごとく、オリブ山に往き給へば、弟子たちも従ふ。四〇 其處に至りて彼らに言ひたまふ『誘惑
 四一 に入らぬやうに祈れ』四一 斯て自らは石の投げらるる程かれらより隔たり、跪づきて祈り言ひたまふ、四二 『父よ、
 四三 御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまへ、然れど我が意にあらずして御意の成らんことを願ふ』四三 時に天
 四四 より御使、現れて、イエスに力を添ふ。四四 イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈り給へば、汗は地上に落つる血の雫
 四五 の如し。四五 祈を了へ、起ちて弟子たちの許にきたり、その憂によりて眠れるを見て言ひたまふ、四六 『なんぞ眠る
 四七 か、起て誘惑に入らぬやうに祈れ』四七 なほ語りぬ給ふとき、視よ、群衆あらはれ、十二の一人なるユダ先だち來
 四八 り、イエスに接吻せんとて近寄りたれば、四八 イエス言ひ給ふ『ユダ、なんぢは接吻をもて人の子を賣るか』四九 御
 五〇 側に居る者ども事及ばんとするを見て言ふ『主よ、われら劍をもて撃つべきか』五〇 その中の一人、大祭司の僕
 五一 を撃ちて、右の耳を切り落せり。五一 イエス答へて言ひたまふ『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて醫し給

五三 ふ。五二 かくて己に向ひて來れる祭司長・宮守頭・長老らに言ひ給ふ『なんぢら強盜に向ふごとく劍と棒とを持ち
 五三 て出できたるか。五三 我は日々なんぢらと共に宮に居りしに我が上に手を伸べざりき。然れど今は汝らの時、また
 暗黒の權威なり』

五四 遂に人々イエスを捕へて、大祭司の家に曳きゆく、ペテロ遠く離れて従ふ。五五 人々、中庭のうちに火を焚
 五五 きて、諸共に坐したれば、ペテロもその中に坐す。五六 或る婢女ペテロの火の光を受けて坐し居るを見、これに目
 五六 を注ぎて言ふ『この人も彼と偕にゐたり』五七 ペテロ肯はずして言ふ『をんなよ、我は彼を知らず』五八 暫くして他
 五八 の者ペテロを見て言ふ『なんぢも彼の黨與なり』ペテロ言ふ『人よ、然らず』五九 一時ばかりして又ほかの男、言ひ
 六〇 張りて言ふ『まさしく此の人も彼とともに在りき、是ガリラヤ人なり』六〇 ペテロ言ふ『人よ、我なんぢの言ふこ
 六一 とを知らず』なほ言ひ終へぬに頓て雞鳴きぬ。六一 主、振り反りてペテロに目をとめ給ふ。ここにペテロ主の『今日
 六二 にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』と言ひ給ひし御言を憶ひだし、六二 外に出でて甚く泣けり。

六三 守る者どもイエスを嘲弄し、之を打ち、六四 その目を蔽ひ問ひて言ふ『預言せよ、汝を撃ちし者は誰なる
 六五 か』六五 この他なほ多くのことと言ひて、譏れり。
 六六 夜明になりて民の長老・祭司長・學者ら相集り、イエスをその議會に曳き出して言ふ、六七 なんぢ若しキリ
 六八 ストならば、我らに言へ『イエス言ひ給ふ『われ言ふとも汝ら信ぜじ、六八 又われ問ふとも汝ら答へじ。六九 然れど
 七〇 人の子は今よりのち神の能力の右に坐せん』七〇 皆いふ『されば汝は神の子なるか』答へ給ふ『なんぢらの言ふこ

イ路二二・三四 三(徒二六・一八) 四・五四 約一八・ 一八・一六一一八、 一四・七〇 ヨ六三・六五 (太 二八)
 口路二二・三七 ホ太二六・五七 可一 一五 二五・二七 ル路七・二三を見よ 二六・六七、六八 可一 二六・二七、三九 來一 ツ太五・二二を見よ
 ハ約八・二、一八・二〇 四・五三 約一八・ト五五・六一 太二六 二六・二六、三を見よ 一四・六五 約一八 二・三 本六七・七一(太二六
 (路二・四六) 一二 六九・七五 可一 一八・二六 一四・六五 約一八 二・三 本六三・六六 可一 六三・六六
 二弗六・一二 西一・一 へ太二六・五八 可一 四・六六・七二 約 又太二六・七三 可一 カ(徒三・一三、一四) 夕太二六・六八 可一 一五・一(約一八・ 四・六一 六三 約

一八・一九―二二
 ナ太一・二七を見よ
 ラ可一六・一九を見よ
 太二六・六四 可一 井太二七・二 可一五
 四・六二
 ム太四・三を見よ
 ウ太二六・六四、二七

一五 約一八・二九
 一三七
 一三三
 一四一
 一四二
 一四三
 一四四
 一四五
 一四六
 一四七
 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五
 一五六
 一五七
 一五八
 一五九
 一六〇
 一六一
 一六二
 一六三
 一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇
 二〇一
 二〇二
 二〇三
 二〇四
 二〇五
 二〇六
 二〇七
 二〇八
 二〇九
 二一〇
 二一一
 二一二
 二一三
 二一四
 二一五
 二一六
 二一七
 二一八
 二一九
 二二〇
 二二一
 二二二
 二二三
 二二四
 二二五
 二二六
 二二七
 二二八
 二二九
 二三〇
 二三一
 二三二
 二三三
 二三四
 二三五
 二三六
 二三七
 二三八
 二三九
 二四〇
 二四一
 二四二
 二四三
 二四四
 二四五
 二四六
 二四七
 二四八
 二四九
 二五〇
 二五一
 二五二
 二五三
 二五四
 二五五
 二五六
 二五七
 二五八
 二五九
 二六〇
 二六一
 二六二
 二六三
 二六四
 二六五
 二六六
 二六七
 二六八
 二六九
 二七〇
 二七一
 二七二
 二七三
 二七四
 二七五
 二七六
 二七七
 二七八
 二七九
 二八〇
 二八一
 二八二
 二八三
 二八四
 二八五
 二八六
 二八七
 二八八
 二八九
 二九〇
 二九一
 二九二
 二九三
 二九四
 二九五
 二九六
 二九七
 二九八
 二九九
 三〇〇

七二 とく我はそれなり』七二 彼ら言ふ『何ぞなほ他に證據を求めんや。我ら自らその口より聞けり』

第二十三章

一 民衆みな起ちて、イエスをピラトの前に曳きゆき、二 訴へ出でて言ふ『われら此の人が、わが國の民を感し、貢をカイザルに納むるを禁じ、かつ自ら王なるキリストと稱ふるを認めたり』三 ピラト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』四 ピラト祭司長らと群衆とに言ふ『われ此の人に愆あるを見ず』五 彼等ますます言ひ募り『かれはユダヤ全國に教をなして民を騒がし、ガリラヤより始めて、此處に至る』と言ふ。六 ピラト之を聞き、そのガリラヤ人なるかを問ひて、七 ヘロデの權下の者なるを知り、ヘロデ此の頃エルサレムに居たれば、イエスをその許に送れり。八 ヘロデ、イエスを見て甚く喜ぶ。これは彼に就きて聞く所ありたれば、久しく逢はんことを欲し、何をか徴を行ふを見んと望み居たる故なり。九 斯て多くの言をもて問ひたれど、イエス何をも答へ給はず。一〇 祭司長・學者ら起ちて激甚くイエスを訴ふ。一一 ヘロデその兵卒と共にイエスを侮り、かつ嘲弄し、華美なる衣を著せて、ピラトに返す。一二 ヘロデとピラトと前には仇たりしが、此の日たがひに親しくなれり。一三 ピラト、祭司長らと司らと民とを呼び集めて言ふ、一四 『汝らこの人を民を感ず者として曳き來れり。視よ、われ汝らの前にて訊したれど、其の訴ふる所に就きて、この人に愆あるを見ず。一五 ヘロデも亦然り、彼を我らに返したり。視よ、彼は死に當るべき業を爲さざりき。一六 然れば懲しめて之を赦さん』一七 『八 民衆ともに叫びて

一九 言ふ『この人を除け、我らにバラバを赦せ』一九此のバラバは都に起りし一揆と殺人との故によりて獄に入れられ
 二〇 たる者なり。二〇ピラトはイエスを赦さんと欲して、再び彼らに告げたれど、二二彼ら叫びて『十字架につけよ、
 二三 十字架につけよ』と言ふ。二三ピラト三度まで『彼は何の悪事を爲ししか、我その死に當るべき業を見ず、故に
 二四 懲しめて赦さん』と言ふ。二三されど人々、大聲をあげ迫りて、十字架につけんことを求めたれば、遂にその聲
 二五 勝てり。二四爰にピラトその求のごとく爲べしと言ひわたし、二五その求むる隨にかの一揆と殺人との故によりて、
 二六 獄に入れられたる者を赦し、イエスを付して彼らの心の隨ならしめたり。
 二六 人々イエスを曳きゆく時、シモンといふクレネ人の田舎より來るを執へ、十字架を負はせてイエスの後に
 従はしむ。

二七 民の大なる群と歎き悲しめる女たちの群と之に従ふ。二八イエス振りて女たちに言ひ給ふ『エルサレムの
 二九 娘よ、わが爲に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。二九 視よ『石婦・兒産まぬ腹・飲ませぬ乳は幸福な
 三〇 り』と言ふ日きたらん。三〇その時ひとびと『山に向ひて我らの上に倒れよ、岡に向ひて我らを掩へ』と言ひ出で
 三一 ん。三二もし青樹に斯く爲さば、枯樹は如何にせられん』
 三三 また他に二人の悪人をも、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく。
 三四 鬻とといふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につ
 三三 け。三四斯てイエス言ひたまふ『父よ、彼らを赦し給へ。その爲す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちて

イ一八—二五 太二七 口路二三・二五 へ路二三・二六 九・一七 三(路一・二七) 夕結二〇・四七 (後 八(提後二・九)
 一五—二六 可一 八徒三・一四 ト路二三・一九 又太二七・三二を見よ 一三、一五 米四・八 力路一七・二二を見よ 一一・三一 彼前四・
 五・六一—二五 (約 二(路二三・四一) 約八 チ約一九・一六 ル(路二三・四九) 番三・一四 亞九・九 ヨ何一〇・八 黙六・ 一七) 五・三三—四四 可一
 一八・三九—一九 (約 四六) 四六) 二六 太二七・三二 王下一九・二二 歌 二 太二四・一九 可一 一六(賽二・一九) 太二七・三八 可一
 一六) 六路二三・一四、一五 可一五・二一(約一 一・五、二・七 賽 三・一七 路二一・二 二二) 五・二七 約一九・一 ツ 太一一・二五を見よ

本約一九・二四 ノ太二・二を見よ ヤ(路二三・三六) コ(約一九・二四) サ太九・八を見よ
 ナ路二三・一三を見よ オ(太二七・三七) 可マ(路二三・二二) エ太二七・五一を見よ ヲ路一八・一三
 ラ(太二七・四三) 路一五・二六 約一九 ク(哥後一二・四) 歌二 テ太二七・五〇 可一 ユ(太二七・五五、五六) ミ五〇・一五六 太二七
 二二・三七、三九) 二九) 七(創二・八) 五・三七 (約一九) 可一五・四〇、四一 五・四二、四七 約
 ム太二・一七を見よ ク三九・四三 (太二) フ四四・四九 太二七 三〇) 路八・二、三、二三) 一九・三八、四二
 ウ太二七・四八を見よ 七・四四 可一五・ 四五一、五六 可一 ア太二七・五四 可一 シ可一五・四三
 井(路二三・三六) 三二) 五・三三、四一 五・三九 二七、五五 約一九 五路二・二五を見よ

三三 閣取にせり、^{三五}民は立ちて見たり。司^{三六}たちも嘲りて言ふ「かれは他人を救へり、若し神の選^{三七}び給ひしキリスト

三六 ならば已をも救へかし」兵卒どもも嘲弄^{三六}しつつ近よりて酸^{三七}き葡萄酒をさし出して言ふ、^{三八}「なんぢ若しユダヤ人

三八 の王ならば、已を救へ」又イエスの上には「此はユダヤ人の王なり」との罪標あり。

三九 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言ふ「なんぢはキリストならずや、已と我らとを救

四〇 へ」。他の者これに答へ禁めて言ふ「なんぢ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。我らは爲しし事の報

四一 を受くるなれば當然なり。然れど此の人は何の不善をも爲さざりき」また言ふ「イエスよ、御國に入り給ふと

四二 き、我を憶えたまへ」イエス言ひ給ふ「われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕にパラダイスに在るべし」

四三 晝の十二時ごろ、日、光をうしなひ、地のうへ徧く暗くなりて、三時に及び、聖所の幕、真中より裂け

四四 たり。イエス大聲に呼はりて言ひたまふ「父よ、わが靈を御手にゆだね」斯く言ひて息絶えたまふ。百卒長

四五 この有りし事を見て、神を崇めて言ふ「實にこの人は義人なりき」これを見んとて集りたる群衆も、ありし事

四六 どもを見てみな胸を打ちつつ歸れり。凡てイエスの相識の者およびガリラヤより従ひ來れる女たちも遙に立ち

四七 て此等のことを見たり。

四八 議員にして善かつ義なるヨセフといふ人あり。この人はかの評議と仕業とに與せざりき——ユダヤ

四九 の町なるアリマタヤの者にて、神の國を待ちのぞめり。此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍體を乞ひ、ユダヤ

五四 れを取りおろし亞麻布にて包み巖に鑿りたる、未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。五四 この日は準備日なり、かつ安息日近づきぬ。五五 ガリラヤよりイエスと共に來りし女たち後に從ひ、その墓と屍體の納められたる様とを見、五六 歸りて香料と香油とを備ふ。

斯て誠命に遵ひて、安息日を休みたり。

第二十四章

一 一週の初の日、朝まだき、女たち備へたる香料を携へて墓にゆく。ニ 然るに石の既に墓より轉ばし除けあるを見、三 内に入りたるに主イエスの屍體を見ず、四 これが爲に狼狽へをりしに、視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。五 女たち懼れて面を地に伏せられたれば、その二人の者いふ『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、六 彼は此處に在さず、甦へり給へり。尙ガリラヤに居給へるとき、如何に語り給ひしかを憶ひ出でよ。七 即ち一人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦へるべし』と言ひ給へり』八 爰に彼らその御言を憶ひ出で、九 墓より歸りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。一〇 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。二 使徒たちは其の言を妄語と思ひて、信ぜず。三 『ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり』

四三 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオといふ村に往きつつ、四 凡て有りし事どもを互に語りあふ、一五 語り、かつ論じあふ程に、イエス自ら近づきて共に往き給ふ。一六 されど彼らの

イ路二四・一、二 へ出二〇・一〇 申五 八
 口察五三・九 一四 八 又徒一・二一
 ハ太二七・六二を見よ ト一〇・一〇 太二八・ 一 一 路二四・二三
 二路二三・四九 一八 可一六・一 五・四六、一六・三、 一 一 路二一・二一、二九 六 路二四・三四
 ホ可一六・一を見よ 一八(約二〇・一一) 四(約一一・三八) 徒一・二〇、一〇、 路九・四四、二四、 五・四〇
 三〇、一二・七 四六
 カ太二八・六 可一六 夕路二四・二一
 六 路二四・三四 一 一 路二二・二二
 ヨ太二六・二二を見よ ソ太二七・五六 可一
 一 路二〇・三三六 一 一 路二二・三三六
 ム路二三・五三 約一
 ツ路八・三 九・四〇
 ナ可一六・一一を見よ
 ウ可一六・一二

井(路九・四五、一八、二二) 一・一八) ユ太一・二七を見よ
 三四、二四・三一 ヤ太二一・二一を見よ コ路二四・七
 約二〇・一四、二二 マ路三三・一三を見よ エ路二四・一〇
 ・四) ク徒二・二三、五・三 テ路二四・一
 ノ約一九・二五 〇、一三・二七、二 ア路二四・三
 才可一・二四を見よ 八 撒前二・一五 サ路二四・四一七
 ク徒二・二二 (徒七、フ(路一・六八 彼前 キ太二六・二四を見よ
 二、三 民二・一九 二、三 民二・一九
 (約三・一四) 申一 四二(太二・一八 五) 徒一三・二七)
 八・一五 (約一・四 一・二一) 五三(太 二可六・四八
 四七 徒三・一八 五) (約五・四六) 八・一七 路二二・三
 來二・一〇 彼前一 シ(母後七・一一一 七) 但七・二三(太 七路二四・三五
 六 賽七・一四(太 二四・三〇、三一) 七路二四・三五(路二
 一・二三) 九・一一 二四・三〇、三一) 米五・二(太二・六) 四・一六
 (太四・一五、一六) 亞九・九(太二・一、ス路二四・四五

一七 目遮へられてイエスたるを認むること能はず。一七 イエス彼らに言ひ給ふ『なんぢら歩みつつ互に語りあふ言は何
 (井) ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、一八 その一人なるクレオパと名づくるもの答へて言ふ『なんぢエルサレ
 一八 ムに寓り居て獨り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』一九 イエス言ひ給ふ『如何なる事ぞ』答へて言ふ『ナ
 一九 ザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて業にも言にも能力ある預言者なりしに、二〇 祭司長ら及び我
 二〇 が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。二一 我等はイスラエルを贖ふべき者は、この人なり
 二一 と望みたり、然のみならず此の事の有りしより、今日にはや三日めなるが、二二 なほ我等のうちの或女たち、我
 二二 らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、二三 屍體を見ずして歸り、かつ御使たち現れてイエスは活き給ふ
 二三 と告げたりと言ふ。二四 我らの朋輩の數人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言ひし如くにしてイエスを見
 二四 ざりき』二五 イエス言ひ給ふ『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。二六 キリスト
 二五 は必ず此らの苦難を受けて、其の榮光に入るべきならずや』二七 斯てモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就き
 二六 て凡ての聖書に録したる所を説き示したまふ。二八 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなほ進みゆく様なれば、
 二七 二九 強ひて止めて言ふ『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたまふ。三〇 共
 二八 に食事の席に著きたまふ時、パンを取りて祝し、擘きて與へ給へば、三一 彼らの目開けてイエスなるを認む、而し
 二九 てイエス見えすなり給ふ。三二 かれら互に言ふ『途にて我らと語り我らに聖書を説明し給へるとき、我らの心、内
 三〇

三三 に燃えしならずや」三三 斯て直ちに立ちエルサレムに歸りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言
 三四 ふ、三三「主は實に甦へりて、シモンに現れ給へり」三五 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給ふによりて
 三六 イエスを認めし事とを述ぶ。三六 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「平安なんぢらに在れ」と言ひ「給
 三七 ふ。三七 かれら怖ぢ懼れて見る所のものを靈ならんと思ひしに、三八 イエス言ひ給ふ「なんぢら何ぞ心騒ぐか、何ゆ
 三九 ゑ心に疑惑おこるか、三九 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあ
 四〇 り、汝らの見ることし」四〇 斯く言ひて手と足とを示し給ふ」四一 かれら歡喜の餘に信ぜずして怪しめる時、イエス
 四三 言ひたまふ「此處に何か食物あるか」四三 かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、四三 之を取り、その前にて食し給
 へり。

四四 四四 また言ひ給ふ「これらの事は我がなほ汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者およ
 四五 び詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり」四五 爰に聖書を悟らしめんとて、彼らの心を
 四六 開きて言ひ給ふ、四六「かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦へり、四七 且その名に
 四八 よりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの國人に宣傳へらるべしと。四八 汝らは此等の
 四九 ことの證人なり。四九 視よ、我は父の約し給へるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に
 留れ」

イ可一六・一三 三三 手約二〇・一九、二一、 四九 前二・一〇
 口(徒一・一四) 二六 四九 九(約一九・二八—
 八路二四・六を見よ 二六 二六 三〇) 七二・一一 二〇)
 二(哥前一五・五 四九 九 九(約一九・二八—
 八路二四・三〇 四九 九 九(約一九・二八—
 八路二四・三一 四九 九 九(約一九・二八—
 二可一六・一四 四九 九 九(約一九・二八—
 三三 九(約一九・二八—
 三四 九(約一九・二八—
 三五 九(約一九・二八—
 三六 九(約一九・二八—
 三七 九(約一九・二八—
 三八 九(約一九・二八—
 三九 九(約一九・二八—
 四〇 九(約一九・二八—
 四一 九(約一九・二八—
 四二 九(約一九・二八—
 四三 九(約一九・二八—
 四四 九(約一九・二八—
 四五 九(約一九・二八—
 四六 九(約一九・二八—
 四七 九(約一九・二八—
 四八 九(約一九・二八—
 四九 九(約一九・二八—
 五〇 九(約一九・二八—
 五一 九(約一九・二八—
 五二 九(約一九・二八—
 五三 九(約一九・二八—
 五四 九(約一九・二八—
 五五 九(約一九・二八—
 五六 九(約一九・二八—
 五七 九(約一九・二八—
 五八 九(約一九・二八—
 五九 九(約一九・二八—
 六〇 九(約一九・二八—
 六一 九(約一九・二八—
 六二 九(約一九・二八—
 六三 九(約一九・二八—
 六四 九(約一九・二八—
 六五 九(約一九・二八—
 六六 九(約一九・二八—
 六七 九(約一九・二八—
 六八 九(約一九・二八—
 六九 九(約一九・二八—
 七〇 九(約一九・二八—
 七一 九(約一九・二八—
 七二 九(約一九・二八—
 七三 九(約一九・二八—
 七四 九(約一九・二八—
 七五 九(約一九・二八—
 七六 九(約一九・二八—
 七七 九(約一九・二八—
 七八 九(約一九・二八—
 七九 九(約一九・二八—
 八〇 九(約一九・二八—
 八一 九(約一九・二八—
 八二 九(約一九・二八—
 八三 九(約一九・二八—
 八四 九(約一九・二八—
 八五 九(約一九・二八—
 八六 九(約一九・二八—
 八七 九(約一九・二八—
 八八 九(約一九・二八—
 八九 九(約一九・二八—
 九〇 九(約一九・二八—
 九一 九(約一九・二八—
 九二 九(約一九・二八—
 九三 九(約一九・二八—
 九四 九(約一九・二八—
 九五 九(約一九・二八—
 九六 九(約一九・二八—
 九七 九(約一九・二八—
 九八 九(約一九・二八—
 九九 九(約一九・二八—
 一〇〇 九(約一九・二八—
 一〇一 九(約一九・二八—
 一〇二 九(約一九・二八—
 一〇三 九(約一九・二八—
 一〇四 九(約一九・二八—
 一〇五 九(約一九・二八—
 一〇六 九(約一九・二八—
 一〇七 九(約一九・二八—
 一〇八 九(約一九・二八—
 一〇九 九(約一九・二八—
 一一〇 九(約一九・二八—
 一一一 九(約一九・二八—
 一一二 九(約一九・二八—
 一一三 九(約一九・二八—
 一一四 九(約一九・二八—
 一一五 九(約一九・二八—
 一一六 九(約一九・二八—
 一一七 九(約一九・二八—
 一一八 九(約一九・二八—
 一一九 九(約一九・二八—
 一二〇 九(約一九・二八—
 一二一 九(約一九・二八—
 一二二 九(約一九・二八—
 一二三 九(約一九・二八—
 一二四 九(約一九・二八—
 一二五 九(約一九・二八—
 一二六 九(約一九・二八—
 一二七 九(約一九・二八—
 一二八 九(約一九・二八—
 一二九 九(約一九・二八—
 一三〇 九(約一九・二八—
 一三一 九(約一九・二八—
 一三二 九(約一九・二八—
 一三三 九(約一九・二八—
 一三四 九(約一九・二八—
 一三五 九(約一九・二八—
 一三六 九(約一九・二八—
 一三七 九(約一九・二八—
 一三八 九(約一九・二八—
 一三九 九(約一九・二八—
 一四〇 九(約一九・二八—
 一四一 九(約一九・二八—
 一四二 九(約一九・二八—
 一四三 九(約一九・二八—
 一四四 九(約一九・二八—
 一四五 九(約一九・二八—
 一四六 九(約一九・二八—
 一四七 九(約一九・二八—
 一四八 九(約一九・二八—
 一四九 九(約一九・二八—
 一五〇 九(約一九・二八—
 一五一 九(約一九・二八—
 一五二 九(約一九・二八—
 一五三 九(約一九・二八—
 一五四 九(約一九・二八—
 一五五 九(約一九・二八—
 一五六 九(約一九・二八—
 一五七 九(約一九・二八—
 一五八 九(約一九・二八—
 一五九 九(約一九・二八—
 一六〇 九(約一九・二八—
 一六一 九(約一九・二八—
 一六二 九(約一九・二八—
 一六三 九(約一九・二八—
 一六四 九(約一九・二八—
 一六五 九(約一九・二八—
 一六六 九(約一九・二八—
 一六七 九(約一九・二八—
 一六八 九(約一九・二八—
 一六九 九(約一九・二八—
 一七〇 九(約一九・二八—
 一七一 九(約一九・二八—
 一七二 九(約一九・二八—
 一七三 九(約一九・二八—
 一七四 九(約一九・二八—
 一七五 九(約一九・二八—
 一七六 九(約一九・二八—
 一七七 九(約一九・二八—
 一七八 九(約一九・二八—
 一七九 九(約一九・二八—
 一八〇 九(約一九・二八—
 一八一 九(約一九・二八—
 一八二 九(約一九・二八—
 一八三 九(約一九・二八—
 一八四 九(約一九・二八—
 一八五 九(約一九・二八—
 一八六 九(約一九・二八—
 一八七 九(約一九・二八—
 一八八 九(約一九・二八—
 一八九 九(約一九・二八—
 一九〇 九(約一九・二八—
 一九一 九(約一九・二八—
 一九二 九(約一九・二八—
 一九三 九(約一九・二八—
 一九四 九(約一九・二八—
 一九五 九(約一九・二八—
 一九六 九(約一九・二八—
 一九七 九(約一九・二八—
 一九八 九(約一九・二八—
 一九九 九(約一九・二八—
 二〇〇 九(約一九・二八—

五〇 遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を舉げて之を祝したまふ。五一 祝する間に、彼らを離れ「天に擧げられ」給ふ。五三 彼ら「之を拜し」大なる歡喜をもてエルサレムに歸り、五三 常に宮に在りて、神を讚めりたり。

ルカ傳福音書 をはり

一・一	或は「篤く信ぜられたる事」と譯す。	八・四五	異本「及び共に在るもの」との句なし。	二二・三一	異本「神の國」とあり。
一・二八	異本「なんぢは女のうちにて恵まるる者なり」との句を加ふ。	九・三六	或は「聲やみし」と譯す。	二二・三九	或は「知る」と譯す。
一・五一	或は「高ぶる者をその心の企圖にて散らし」と譯す。	九・五四	諸異本「エリヤの爲しし如く」の句あり。	二二・四六	或は「挽き斬り」と譯す。
二・一四	異本「いと高き處には榮光、神に、地には平和、人には恵あれ」とあり。	九・五五	異本「戒めて言ひ給ふ、汝らはおのが心の如何なるかを知らぬなり。人の子は、人の生命を亡さんさにあらで、之を救はんとして來れり」の句あり。	二二・四九	或は「われ何をか望まん、此の火の既に燃えたらんことなり」と譯す。
二・三六	或は「七年さもに在りて寡婦となり今は八十四歳なり」と譯す。	一〇・四二	異本「多からず」の句なし。	二四・五	異本「驢馬」とあり。
二・四九	或は「我が父の事を務むべきを知らぬか」と譯す。	一一・三	異本「御心の天のごとく地にも行はれんことを」との句あり。	二七・六	原語「スカミノ」
二・五二	異本「ガリラヤ」とあり。	一一・四	異本「惡より救ひ出したまへ」の句あり。	二七・三六	異本「二人の男畑に居らんに、一人は取られ、一人は遺されん」との句あり。
四・四四	直譯「生捕らん」	一一・一一	異本「子さ魚との間に「パンを求めんに、石を與へ」の句あり。	二七・三七	或は「元鷹」と譯す。
五・一〇	或は「兄弟」と譯す。	一一・一二	或は「ひるげ」と譯す。	二八・二八	或は「我が家」と譯す。
六・一六	或は「木屑」と譯す。	一一・一三	或は「生命」と譯す。	二九・四	原語「スカモラ」
六・四一	異本「ただ御言を賜へ、さらば我が僕は癒えん」とあり。	一一・一四	或は「その生命を寸陰も延べ得んや」と譯す。	二九・一三	一ミナは凡そ我が三十二圓に當る。
七・三五	或は「せられたり」と譯す。	一一・一五	或は「野の花」と譯す。	二九・一四	或は「生命」と譯す。
八・二九	或は「久しく」と譯す。	一一・一六	或は「その生命を寸陰も延べ得んや」と譯す。	二九・一五	異本「かれば祭毎に必ず一人を救すべきなり」との句あり。
八・四三	異本「醫者の爲に己が身代を悉く費したれども」の句なし。	一一・一七	或は「野の花」と譯す。	二九・一六	異本「かれば祭毎に必ず一人を救すべきなり」との句あり。